

VIEW21

〈ビュー21〉
高校版
Volume 4

2014
October

10月

「**できる!**」「**できた!**」を
仕掛ける

変化を生き抜く「軸」と「修正力」の育成①

自己肯定感を高める 教育活動の トータルデザイン

ベネッセ教育総合研究所

新課程 指導最前線

2年生に対する
受験生への切り替え指導

指導変革の軌跡

秋田県立 花輪高校
広島県・私立 広島女学院中学高校

半歩未来を考える教育オピニオン

「知の統合」の流れが
学問のあり方を変える

2014
October

10月

高校版
Volume

4

今月の表紙メッセージ

「できる!」「できた!」
を仕掛ける

◎現場の先生方へのヒアリングや、取材を通して見えてきたのは、自己肯定感が生徒の中に「軸」を育み、それを支えるということ。いかに生徒に「できる!」「できた!」と感じさせる仕掛けを、教師が施せるか。今号はその点について、教育活動全体の視点から考えます。

『VIEW21』高校版
副編集長 竹内正興

2 私を育てたあの時代、あの出会い

現状に甘んじることなく常に上を目指し、変化した
石川県立金沢泉丘高校◎森 博之

4 特集

変化を生き抜く「軸」と「修正力」の育成①

自己肯定感を高める
教育活動のトータルデザイン

6 座談会 軸と修正力を育むために学校という「社会」をデザインする
大阪産業大 教養部教職課程 准教授 定金浩一 / 栃木県立栃木高校 篠山秀志 /
長野県・私立エクセラン高校 吉見繁憲

10 学校事例 自己肯定感と多角的な視点を生徒に育む指導とは
北海道・私立札幌日本大学高校 / 神奈川県・私立聖セシリア女子中学・高校 /
長崎県立長崎西高校

22 新課程 指導最前線

2年生に対する受験生への切り替え指導
岡山県立倉敷青陵高校 / 佐賀県立致遠館中学・高校

26 指導変革の軌跡

秋田県立花輪高校
キャリア教育◎振り返りと評価指標を重視したキャリア教育で社会人に求められる力を育む
広島県・私立広島女学院中学高校
難関大指導とスーパーグローバルハイスクール◎難関大対策講座とグローバル教育を機に生徒の意欲を高める

34 生きたデータの徹底研究

3年生2学期後半の意識付け

38 半歩未来を考える教育オピニオン

「知の統合」の流れが学問のあり方を変える
産業技術大学院大 特任教授・名誉教授◎福田哲夫

42 未来をつくる大学の研究室

磁石を応用した新素材・技術を開発し生活の快適性・利便性を向上させる
豊橋技術科学大大学院 工学研究科 井上光輝研究室

46 VIEW'S REPORT

4技能を問う外部英語検定試験を導入
グローバル人材の育成に向けて筑波大が推進する入試改革の内容に迫る
筑波大理事、副学長(教育担当)◎阿江通良

2014年12月に関西学院大で開催!
日本最大のグローバル大学博覧会「第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014」
関西学院大副学長(国際連携機構長)◎神奈隆博

54 【告知】ウェブで参観できる「シリーズ 授業大公開」がオープン!

60 Reader's VIEW

<http://berd.benesse.jp> 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

現状に甘んじることなく 常に上を目指し、変化した

石川県立金沢泉丘高校 森博之

豊かな歴史の中で受け継がれてきた価値観を見直し、取り組みに手を入れることは決して容易ではない。「余計なことをして、失敗したらどうする？」と皆が臆する中、「前例踏襲は退廃につながる」と誰かが声を上げた……。森博之先生が変革の時代を振り返る。

東京大合格者が3倍に



石川県立金沢泉丘高校に赴任したのは、2001年度、

教師になって14年目の時です。県内屈指の進学校でありながら、部活動もとても盛んな伝統校で、生徒たちは充実した高校生活を送っていました。

赴任4年目に初めて担任を外れ、進路指導専任になりました。当時、金沢泉丘高校の生徒の主な志望先は京都大、大阪大、そして金沢大で、東京大などの関東の大学に関心を示す生徒、保護者は決して多くはありませんでした。その頃、同校はいち早く学校経営計画を立案し、「確

かな学力を身に付けた、次世代

リーダーの育成」を目標に掲げていました。そしてその実現のために、東京大を含めた広い視野で志望校を考えることが必要だと、進路指導課長の菱田浩章先生は考えておられました。

「地元にこだわることなく、よりその生徒に合った、より高い目標に向かわせたい」と進路指導課や各学年団に発信する菱田先生と仕事をするうちに、私も「希望を受け入れられるだけの指導は進路指導とは言えない」「生徒が気付いていない観点で進路を示し、深く考えさせるべきだ」と思うようになりました。そして思い付いたのが「東京大入試説明会」です。「高い目標を目指す仲間がたくさんいること、

そして、教師が一丸となって支えようとしていることを目に見える形で示したい」と菱田先生

もともと私は、従来の取り組みを刷新したり、新しい企画を立ち上げたりすることが好きでした。とはいえ、金沢泉丘高校のような学校で、しかも30代後半の私が学校の進路実績に大きくかわるような企画を運営することが出来るのか、そもそも生徒は集まるのか……。しかし、そんな私の不安も、菱田先生の「それ、面白そうだねえ！」というひと言で解消されました。

それから数か月間、進路指導課を挙げて、生徒に声を掛けると共に、各教科に添削指導の協力をお願いし、「東京大入試説

明会」の準備と入試本番までの体制づくりを進めました。そして迎えた説明会には、30人以上

の生徒が参加。生徒たちは「仲間がたくさんいることに驚いた」「みんなに負けないように頑張りたい」と感想を口にしました。

結果、例年5、6人の東京大合格者が、その学年では20人と3倍を超え、京都大合格者も増加しました。学校全体の志望の底上げが実現したのです。

常にあとひと工夫を考える

菱田先生は、私を始め進路指導課のスタッフと常に議論しながら、進路指導のあり方を改善されていきました。菱田先生が「前例踏襲」を嫌いなことは

先輩教師の言葉

進路指導に「失敗」があるならそれは形骸化だ

石川県立金沢伏見高校 校長 菱田浩章



森先生が金沢泉丘高校の進路指導課に配属になった

年度の3年生は、同校が様々な学校改革に取り組み始めた最初の学年でした。意識の改革は、生徒はもちろん、教師にも求められていました。例えば、「最近の生徒は基礎学力が身に付いていない」「当たり前前のことが出来ない」と嘆くことを、私たち教師がやめようというのもその1つでした。事実を受け止めて、やるべきことを考える教師集団になりたかったのです。

進学実績の面でも、生徒たちは確かに志望校に合格してはいましたが、果たしてこのままでよいのか、それぞれが1段階ずつ、高い目標を目指すよう、生徒を刺激してみよ

左 もり・ひろゆき 数学科。石川県立金沢辰巳丘高校、羽咋高校を経て、金沢泉丘高校へ。主幹教諭。教務主任。

右 ひしだ・ひろあき 地歴・公民科。石川県立小松高校、金沢泉丘高校などを経て、小松市立高校で校長を務める。その後、金沢伏見高校へ。校長。

撮影◎金沢伏見高校にて



分かっていましたから、生徒や保護者向けの説明会の企画を考えた。会議資料を作ったりする時は常に工夫すべき点がないかを考えました。例えば、進路検討会用の資料では、それまで生徒本人の志望大と成績だけを一覧化していたところに、「担任が進学させたい大学」の欄を加えました。その改訂がベストだったのかは分かりませんが、

少しでも生徒のためになりそうだと思うなら、迷わず実行する雰囲気は課内にはありました。今思えば、菱田先生は「新しい挑戦」が好きな私の性格を見抜いていたのでしょう。菱田先生の指示はいつも「ポイントはこれだけ！あとは考えてね」といった感じで、私が工夫する余地を残してくださっていました。もちろんその分、いろ

いろな先生方に話を聞くなど、自ら学ぶことも必要でしたが、新しいものを創り出す充実感のため、仕事を負担に感じたことはありませんでした。「新しいものをつくったり、何かを変えたりして、うまくいかなかったら……」と、特に若い先生が心配する気持ちも分かります。しかし、社会や生徒が絶えず変化する中で、かつて正

しかったことが、今も正しいとは限りません。どうすればいいのか周囲の先輩に相談し、自分でも勉強していけば、きつと新しい挑戦は成功します。金沢泉丘高校も若い先生が増えています。学校をもっと良くしようという情熱に期待したいです。菱田先生のように私も「変化を恐れるな」と彼らに伝えていきたいと思っています。

うと考えました。だから森先生の「東京大入試説明会」はとても魅力的でした。生徒を褒めることも叱ることも上手な森先生なら、感受性豊かな生徒たちを最後まで導いてくれると期待していました。私は進路指導には、こうすればうまくいくという正解はないけれど、一方で大きな失敗もないと思っています。たとえその場ですぐに効果が出なくても、中長期的に見れば、いつか生徒の心に火をともし、かもしれないからです。ただし、失敗があるとしたら、それは前例踏襲になり、取り組みが形骸化することです。その意味で、私が今反省しているのは、若い先生方に「古いものの壊し方」をもっと教えるべきだったということ。森先生たちは新しい挑戦、工夫を続けてくれましたが、勇気を持ってやめることで現状を打開する局面も、もっと彼らと一緒に経験できればよかったと思います。歴史はあが形骸化してしまったことをやめるのは、魅力的な新しいことを始めるのと同じくらい大切で、大変なことですから。森先生なら、若い先生のエネルギーを引き出して、それが出来ると思っています。

変化を生き抜く「軸」と「修正力」の育成①

自己肯定感を高める

教育活動の

トータルデザイン

本誌8月号では、10年後を見据えた人材育成における指導の観点の1つとして、

変化の激しい社会を生き抜くために必要な、変化に流されない「軸（をつくる力）」と

その「軸」に基づいて変化に柔軟に対応する「修正力」の育成を取り上げた。

今号から、その2つの力を高校教育においてどのように育んでいくのかを考えていく。

Q. 8月号の特集へのご意見・ご感想をお聞かせください。

◎職場環境が変わり、異文化とのギャップに直面した鳥山恵美子さん、過疎の町という現実を突き付けられた大南信也さん、リストラという想定外の変化に遭遇した花輪陽子さん、それぞれ違うケースではあったが、いずれの方も「変化」は「学び」のチャンスであり、「変化」は「成長」の促進剤であることを伝えてくれた。「変化」は成長の栄養素であることを十分認識し、積極的に楽しんで消化吸収できる教師でありたいし、そういう生徒を育てたい。
(岩手県)

◎変化の時代に求められる修正力。その力を身に付ける前に、変化に対応できる基本・基礎のような土台となるべき力や教養が必要であることは誰もが疑わないだろう。ただ、基礎力の育成が指導の中心にな

っているのも事実かと思う。私たち教師が生徒の発言、発想や行動力をもっと信じて、見守り、そして、時には仕掛ける勇気を持たなければならぬと感じた。
(東京都)

◎大南信也さんが言われた「創造的過疎」という言葉に感銘を受けた。自分の軸が明確であれば、地方の持続的成長の可能性もあると思うし、自校の生徒・保護者の安定志向の中に、地方を愛し、支える人材としての誇りを感じる時もある。この人材と「創造的過疎」がうまく連携できればよいのではないか。確固たる軸の基礎は、生徒の仲間づくりの力と自己肯定感、変化に気付く力だと思う。
(徳島県)

出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは、2014年8月にウェブとファクスで実施。有効回答数は56（2014年9月15日時点）

8~2月号の共通テーマ

10年後を見据えた人材育成

8月号で
見えてきたこと

- ◎今後10年間も、変化の激しい社会であることが予想される
- ◎そのような社会を生き抜くためには、自分の中に、変化に流されない「軸」（目標や目的、信念、こだわりなど）を持つこと、そして、その「軸」に基づいて柔軟に変化に対応する「修正力」が求められる

本号のテーマ

高校教育において、生徒の中に「軸」を育み、「修正力」を高めるために必要な指導とは？

まず必要なのは、「軸」を支える「自己肯定感」と変化（＝修正機会）に気付ける「多角的な視点」の育成

座談会【P.6~9】



大阪産業大
教養部教職課程
准教授
定金浩一



栃木県立
栃木高校
篠山秀志



長野県・
私立
エクセラン高校
吉見繁憲

事例を通じて、「自己肯定感」と「多角的な視点」を生徒に育む指導を考える

学校事例【P.10~21】

北海道・私立
札幌日本大学高校

- ◎進路学習や定期考査など、様々な活動を通して生徒にPDCAサイクルを繰り返させ、その積み重ねを可視化することで、自己肯定感を高める
- ◎進路学習における生徒同士の話し合い、調べ学習、教師からの様々な情報提供を通じて、生徒の視野を広げる

神奈川県・私立
聖セシリア女子
中学・高校

- ◎学校行事や部活動など、生徒自身が活躍する場を通して、「自分も出来る」という自己効力感を高める
- ◎学習計画とその達成状況を可視化することで、自分自身を客観的に振り返る視野の広さを身に付けさせると共に、目標を達成したり、学習計画の修正がうまくいったりすることで、生徒の自己肯定感が高まる

長崎県立
長崎西高校

- ◎自律を体現する場を日常生活や行事に設けることで、自己肯定感を高める
- ◎生徒を褒めるだけでなく、「君たちの力ならもっと出来る」などと声を掛け、生徒の悔しい思いを向上心に結び付ける

軸と修正力を育むために 学校という「社会」をデザインする

本誌8月号の特集記事では、変化の大きな時代を生き抜くために必要な力として「軸をつくる力」「修正力」を取り上げた。学校現場はこの記事をどのように受け止めたのか。この座談会では、それぞれの学校で行われてきた取り組みと照らし合わせながら、10年後の社会を生き抜く人材を育成する学校像を検証してみる。

軸と修正力を育むのは 自己肯定感と多角的な視点

編集部 8月号の特集では、10年後の社会を生き抜くために必要な力として、確固たる目標、信念、こだわりといった「軸」をつくる力と、柔軟に変化に対応し、目標までのプロセスや目標到達のための手段、時には目標そのものを「修正」する力を取り上げました。まず記事の印象から教えてください。

定金 ICTの進歩などによって、新しい職業が誕生し、大学生でも職業の内容を理解し、自分に合ったものを見つけることは簡単ではない時代です。「やってみないと分からない

いこと」が社会に増えている中、生きることが考え続けることなのだということ、高校生に伝えるべきだという点で共感しました。

吉見 見通しが立ちにくい時代、モノがあふれる社会に生徒が生きていきます。豊かだからこそ、生徒は与えられることに慣れてしまい、学校でも「先生、〇〇が足りません」「××がほしいです」と声は上げるけれど、自分で探したり、工夫して何かを作ったりすることが出来ません。自ら動き、状況を変えなければいけないという意味で、「修正力」という言葉は心に響きました。

篠山 社会経験が乏しいまま、高校生がこだわりを持つことは、進路の

大阪産業大 教養部教職課程 准教授

定金浩一 さだかね・こういち

教職歴33年。兵庫県立西宮香風高校校長などを経て、2014年度より現職。臨床心理士。



選択肢を狭めてしまう恐れがあります。進学でも就職でも「やってみないと分からないこと」があるということを理解し、経験を積みながら、徐々に「軸」を見いだしていくこ

長野県・私立エクセラン高校

- ◎設立 1952(昭和27)年
- ◎形態 全日制/普通科(園芸農業、生活文化、国際理解、環境科学の4コース) 美術科、福祉科/共学
- ◎生徒数 1学年約120人
- ◎14年度入試合格実績(現役のみ) 公立大は、長岡造形大、私立大は、東海大、東北芸術工科大、日本福祉大、帝京科学大などに8人が合格。このほか、短大、専門学校に37人が合格。また、卒業生のうち45人が就職。
- ◎住所 〒390-0221 長野県松本市里山辺4202
- ◎電話 0263-32-3701
- ◎Web Site <http://www.excellent.ed.jp/>

栃木県立栃木高校

- ◎設立 1896(明治29)年
- ◎形態 全日制/普通科/男子
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎14年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、宇都宮大、千葉大、東京工業大、名古屋大、京大などに137人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ454人が合格。
- ◎住所 〒328-0016 栃木県栃木市入舟町12-4
- ◎電話 0282-22-2595
- ◎Web Site <http://www.tochigi-edu.ed.jp/tochigi/nc2/>

とが大切になっていきます。社会の変化のスピードが速くなる中で、新しい環境に飛び込んでも自分を見失わず、そこで求められる自分の存在価値を示していく力が必要であり、それも修正力の1つだと思いました。

定金 記事の中で特に印象的だったのが、社会人のインタビューです。リストラや配置転換など予想外の事態に、前向きなエネルギーと粘り強さで向き合う姿には、これからの生徒に必要な軸の強さと柔軟な修正力を感じました。

吉見 見通しが立たなくても、目



栃木県立栃木高校

篠山秀志

しのだ・ひび

教職歴30年。同校赴任5年目。栃木県立佐野高校などを経て現職。担当科目は化学。SSH推進委員会委員長。

の前のことをしっかりとやっていけば歩むべき道が開けていくことをリアルに教えてくれる事例でした。生徒にこそ読ませたい記事だと思いました。

篠山 3人の社会人は自己肯定感が高く、自分が置かれた状況を多角的な視点で解釈していました。生徒も、社会に出た時、先が見えない岐路に立つことがあるでしょう。その時、悩みながらも自分なりの答えを出して前に進むためには、同じように自己肯定感と多角的な視点が必要なのだと思います。



長野県・私立エフセラン高校

吉見繁憲

よしみ・しげのり

教職歴19年。長野県公立高校での勤務を経て同校へ。勤務12年目。3学年主任。担当科目は数学。

生徒のものの見方を広げる 場面を意図的につくる

編集部 先生方は、軸をつくる力、

修正する力を日々どのように育まれているのでしょうか。

定金 進路指導では、興味のあることを大切にしながらも、別の分野にも関心を向けることで、多角的な視点を身に付けさせてきました。オーブンキャンパスでも、あえてあまり関心がなかった学問にも接してみるように勧めました。実際、「先生に言われて参加してみたら、学問の印象が変わりました」と感想を話す生徒は少なくありませんでした。

吉見 よく生徒に「頑なにならず、いろいろな出会いを楽しむ中で、より自分に合った選択肢が見つかることもある」と話しています。進路選択ではそうした気持ちの余裕を持た



竹内正興

たけうち・まさおき

ベネッセ教育総合研究所

VIEW21 高校版副編集長

せたいと思っています。

篠山 授業中のちょっとした雑談も、知的好奇心を広げる良い機会です。例えば、日本の研究者や技術者がどんな努力をしているかを話すことで、学問の面白さを知る生徒もいます。「自分のやりたいことが、考えたこともなかった学部・学科でも学べるのだと、先生の話聞いて気が付きました」と言ってくる生徒もいました。生徒の内面にある既成概念を揺さぶりながらじっくりと軸をつくった方が、しなやかで折れない軸が生まれる気がします。

定金 やはり生徒には試行錯誤が必要です。その生徒にぴたりと合ったものを示すことも可能ですが、ちよつとずれているけれど気になるものを示して、試行錯誤させたいですね。そして、試行錯誤した自分を生徒に語らせることが大切です。生徒は話すことによって、自分の考えを整理しますから。

吉見 あの仕事がいい、この大学がいい、いや、やはりこちらが……とあれこれ迷う気持ちを教師がしっか



化したことを意味し、修正力の土台が出来たとと言えます。

吉見 まず、私たち教師が「志望が下がれば合格の可能性は高くなるが、代わりに満足度も低くなる」という前提を捨てなければいけませんね。

篠山 そのためには教師も、大学の難易度やネームバリューに惑わされず、「自分が育てた教え子が通うのにふさわしい大学なのか」を見極める冷徹な目を持ち、情報を収集することが必要ですね。

学校という枠の中で 生徒の世界を社会化する

編集部 目標を掲げ、そこに到達するプロセスを検証し、必要に応じて修正する場として、学校行事や部活動も重要だと考えられます。

定金 私は、行事や部活動は、将来社会で自分がどう生きていくかを考える「小さな社会」なのだと思います。生徒が自分で考え、自己決定していく場を学校の中につくることが大切ではないでしょうか。学校という枠の中で、出来る限り生徒が自由に活動することで、生徒は交渉したり、我慢したり、視点を変えた

りと、社会で必要な普遍的な生きる力を身に付けることが出来ます。枠の中にも、「自由に出来る部分はたくさんある」ということを生徒に伝えることが大切です。

篠山 行事が盛り上がる学校ほど、生徒の思いが学校と衝突することもあるものです。そうした機会を捉え、生徒が大人である教師や保護者と話し合う場面をつくるのが大切です。社会に出れば当たり前にある「縦の関係」の中で、大人の論理に出合う場面です。生徒に価値観の多様性を期待するのであれば、大人としての信念と、生徒とぶつかる覚悟が必要でしょう。

吉見 教師が生徒の意思決定を尊重する態度を貫くことも大切だと思います。教師が判断した方が確実で、しかもスムーズなケースはたくさんありますが、私は可能な限り生徒に「どうすればよいか自分たちで考えてみて」と伝えています。高校は自分たちが主役の社会なのだということを3年間掛けて体感させることで、生徒は少しずつ主体的に活動できるようなと思います。

定金 心に火がとまり、主体的に動

く生徒が出てくると、その火は他の生徒に燃え移り、「自分も同じようになりたい」と考えます。集団の中の行動特性を活用して、行事を通して軸と修正力を育みたいですね。

教科指導力が 生徒の自己肯定感を高める

篠山 行事を通して様々な成功体験を積み重ね、リーダーシップやフォローシップを発揮することで、生徒は次第に自己肯定感を高めていきます。一方で、高校生はちょっとしたことで自信を失うことがあります。そうした生徒が再び自信を取り戻す格好の場となるのも行事や部活動です。

定金 どの生徒もちょっとしたきっかけで大きく変わる可能性を秘めていますからね。中学校ではずっと不登校だった生徒が、高校で大きく変化し、学校行事の中心人物にまでなったこともあります。高校に通っている以上、どの生徒も「成長したい、変わりたい」と願っています。面談などで、既にうまく行っている部分や、生徒の力や強さを見つけ出し、それを拡大し発展させるこ

り聞くことで、生徒の軸が次第に出来上がっていくのだと思います。
篠山 軸の有無が最も問われる場面が、第2、第3志望の進路を考える時でしょう。第1志望はいろいろな要件が満たされているけれど、第2、第3志望を考える中で自分の軸が見つかることがあります。第1志望とは別の観点で第2、第3志望の魅力を生徒が説明できるようにすれば、それは生徒が、人生の可能性を複雑

とを心掛けたいですね。

吉見 部活動や学校行事の良さは、周囲との関係の中で「自分は必要な存在だ」と確認できることです。それが自己肯定感につながると、生徒はいっしょか自分を他人と比べる以上に、昨日までの自分と比べるようになりません。そうなれば、社会に出た時にも突然の環境変化に焦ることなく、次に目指すべき自分に向き合うことが出来るはずです。

篠山 それぞれの生徒に合った自己肯定感の高め方を、教師が見極めたいですね。生徒によっては、あえて高い壁に直面させて失敗させることで、達成感の質を高めた方がよいこともあります。

定金 当然、授業も手段の1つです。問題に粘り強く向き合うことで得られた自己肯定感、社会に出ても必要なのものです。

篠山 教科学習の場面で自己肯定感を得させるためには、まさに教師の教科指導力が問われます。的外れに思える意見や解答も「その着眼点は面白い。なぜなら……」と多角的

な解釈で授業をまとめ上げていくのは、まさに教師の授業修正力であり、生徒の多角的な視点の育成にもつながります。また、そうした教師であればじめて生徒の信頼を勝ち得ることができ、部活動や行事の場面でも生徒としっかりと向き合うことが出来ると思います。

吉見 学習面で自信がない生徒に対しては、授業の受け方やノートの取り方など小さなルールを順守するように徹底することが大事だと思います。授業の中の基本ルールが守れるようになったことを教師が認め、褒めることが、生徒の自信になるからです。逆に言えば、教師が授業のルールをあいまいにしてしまうことは、生徒の努力を評価する機会を失っているわけです。

生徒自身が成長を実感できる工夫を

編集部 先生方のお話を伺って、生徒が自分の成長を確認し、自己肯定感を高めていく仕掛けが重要なのだと思います。

定金 面談でも、教師が「ここが駄目」「こうしなさい」と一方的に話すのではなく、生徒にどうしたいかを考えさせ、それを生徒自身に語り、教師はそれを前向きな言葉で励まし、生徒の行動を促すべきです。

吉見 生徒の言葉を持つことは教師にとつて楽ではなく、ついあれこれと指示をしたり、答えを先に言ってしまうたりしがちです。生徒の言葉待ちきれた時に、生徒が大きく変わるのだと信じたいですね。

篠山 褒める時は、本人が納得できる事実を基にしなければ、生徒に自信を与えることは出来ません。口先だけで褒めていても、見破られてしまいますから。

定金 私は生徒自身に課題を整理させ、その上で「今の自分出来ること」を考えさせていました。そして、スマールステップで少しずつ目標を高く設定し、その目標をクリアさせることで、達成感を味わわせることを繰り返していました。また、学習の記録などで生徒の変容を可視化し、具体的に褒めるのもよいでしょう。

う。生徒を動かし続けるには、自己肯定感を土台にした内発的な動機が欠かせません。内発的な動機が十分であれば、生徒は高校生活で壁に直面しても自ら修正するはずです。

吉見 面談で生徒の言葉に真摯に耳を傾け、私たち教師も生徒から何かを学び取ろうという姿勢を持ち続けたいと思います。同僚の先生方とは「1日1つ、生徒から何かを学べたら、それは私たちの成長ですね」と話しています。そうした気持ちが生徒の言葉を引き出すはずですよ。

篠山 高校教師の仕事の1つが、知識と学び方を「教え込む」ことである以上、教師には、生徒よりも高い目線と豊かな知識を持ち、生徒を導くことがこれからは変わらざるを得ません。ただ、変化の大きな10年後を生き抜くためには、教師の役割はそれだけにとどまりません。生徒の視点、生き方は多角化・複雑化しているか、自身の小さな成長を確かめているかを、生徒の言葉を引き出しながら確認していくことが、これからは重要になってくると思います。

「N.DREAM PLAN」で PDCAサイクルを 自然に身に付ける

将来、どのような社会であっても生き抜いていけるように、自分で考えて行動できる力を身に付けてほしい。そうした思いから、札幌日本大学高校は、進路学習や定期考査などにおいてPDCAサイクルを繰り返す「N.DREAM PLAN」を考案し、2013年度から始めている。

生徒に考える力、
自己管理能力を付けたい

札幌日本大学高校は、北海道札幌市に隣接する北広島市に位置する共

自己肯定感と多角的な視点を 生徒に育む指導とは

座談会では、「軸」をつくり、「修正」する力を高めるためには、「自己肯定感」や「多角的な視点」の育成が求められるということが、先生方の共通認識として確認された。では、それらを育むために、高校段階ではどのような指導が求められるのか。地域性や生徒の気質、進学実績などが異なる3校の取り組みを紹介する。

学の私立高校だ。主に国公立大進学を目指す「特進コース」「中高一貫コース」と、主に日本大及び私立大進学を目指す「総合進学コース」から成る。2013年度からは、目指

図1 「N.DREAM PLAN」の内容

- **N.Data**
卒業生の模試成績推移とセンター試験の成績、受験校とその結果などのデータや合格体験記、日本大の各学部・学科の紹介と推薦基準などを掲載する進路に関する情報誌。年1回配布。
- **N.Report**
生徒・保護者に配布する進路通信。月1回発行。大学情報や模試結果、学習時間調査の結果などを掲載。学年ごとの情報を3学年分同時に掲載し、1・2年生が次年度に向けての意識を持てるようにしている。
- **N.Explorer**
職業研究や学問研究などを行う進路学習教材（ベネッセの『進路サポート』）。毎週月曜のLHRや宿泊研修で活用。生徒個々で調べたり、生徒同士で話し合ったりしながらワークシートに書き込み、自分を見つめ、将来を考える材料とする。
- **N.Assist**
学年ごとに1年間の学習を記録する冊子。年間目標を立て、定期考査や模試の度に、目標得点、計画、得点、反省、今後の抱負などを書き込む（P.12 図2参照）。得点は折れ線グラフに書き、得点推移がひと目で分かるようにしている。2年生では「志望校宣言」も行う。
- **N.Manager**
1週間の計画と実行状況を書き込む手帳。週末には1週間の振り返りを書き、担任に提出。担任はコメントを書いて返却する。相談事を書く生徒もあり、生徒と担任の交換日記のような役割も果たす（特進コースのみ）。



「N.Explorer」と「N.Assist」は、その他の資料と共に3年間の記録をまとめられるよう、1人1冊のファイルに綴じられている。

札幌日本大学高校

◎北海道日本大学高校を創始とし、1987(昭和62)年開校。校訓は「創造・敬愛・剛健」。特進コース、総合進学コース、中高一貫コースがある。2012年度から5年間、スーパーサイエンスハイスクールの指定校。

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約360人

◎2014年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、東北大、京都大、大阪大などに74人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、日本大などに延べ385人が合格。

◎URL <http://www.sapporonichidai.ed.jp>



成田憲紀

なりのりき

札幌日本大学高校
教職歴13年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「後生を畏るべし。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや」



八木和彦

やぎ・かずひこ

札幌日本大学高校教頭
教職歴27年。同校に赴任して28年目。「生徒の可能性は無限。在学中、いろいろなこと挑戦してほしい」

「育成人材像に「世界に貢献する人」を掲げ、優れた人間性と実力、夢や自信を持たせる教育を行う。その一環として、同じく13年度に始めたのが「N.DREAM PLAN」だ。「N.Data」「N.Report」「N.Explorer」「N.Assist」「N.Manager」の5つで構

成される(図1)。その特徴は、様々な活動を通してP.D.C.Aサイクルを繰り返して、生徒が考える習慣や自己管理能力を身に付けられるようにしている点だ。「N.DREAM PLAN」を立案した進路指導部長の成田憲紀先生は、次のように説明する。

「生徒が社会に出てから必要となる力を考えた時に、考えて動く『考動力』がとても大事になると常々考えていました。10年後、20年後の日本がどうなっているのかは分かりません。その不透明な社会を生き抜くために、自分で考えて、適切な行動が出来る力を、生徒に身に付けさせたいと思ったのです。高校生の段階から考える習慣を付け、自己を管理する経験を積み重ねられるようにしようと、他校の取り組みも参考にしながら、1つひとつの活動内容を考えました」

それまでも、担任が個々に進路学習や家庭学習時間の記録などの活動を行っていた。それらを取りまとめ、学校全体で推進するために、3年間を見通した進路指導システムを体系

化した。更に、成田先生が教師一人ひとりに内容を説明し、改善点を聞き取っていった。新しい取り組みをより良い形で始めるために、担任が運用しやすいようにすると共に、生徒に考える力や自己管理能力を身に付けさせるといふ狙いを、学校全体に浸透させる目的もあった。八木和彦教頭は、次のように話す。

「社会で活躍し、世界に貢献する人材となるための基礎を築くのが高校3年間です。今の段階でよいので、自分の人生をしっかり考えてほしいと思いました。その実現のためにも、学校として進路学習を体系化し、どの教師がどの学年を受け持つことも指導を保障できるようにすることが重要です。ただ、新しい取り組みです。教師の負担は確実に増えます。導入に当たっては、教師全員の納得が得られるように、職員会議で何度も趣旨を説明しました」

「考え、書き、振り返る」を
何度も繰り返す

「N.DREAM PLAN」の中心となる

取り組みは「N.Explorer」「N.Assist」「N.Manager」だ。

● N.Explorer

進路学習教材の冊子であるベネッセの『進路サポート』を活用。3年間の実施計画を立て、毎週月曜のLHRや宿泊研修などで、生徒同士が話し合ったり、職業や学問について調べ学習をしたりしながら、自分を見つめつつも視野を広げていき、将来を考える材料にする。

「以前から、進路ガイダンスや大卒の出張講義、外部講師による講演会などを行い、生徒に進路情報を提供していましたが、学んだことをアウトプットする機会はほとんどありませんでした。『N.Explorer』によって、インプットした情報を取捨選択し、自分の考えとして書いて残せるようにしました」(成田先生)

入学時の早い段階には、「自分を知り、それを相手に伝える」というグループエンカウンターを行う。自分を見つめ、その上で他の生徒の話聞くことによって、他者を尊重しながら人間関係を築く姿が見られる

ようになったという。

●N.Assist

定期考査と模試の結果を1年間継続して記録する冊子。年度初めに1年間の学習目標を立て、その後は定期考査や模試ごとに、目標得点と試験に向けた学習計画、得点と反省、今後の抱負などを書く(図2)。進研模試では、志望校の合格ラインを基に目標点を書くように指導し、入試では何点取らなければならぬかを意識させる。また、得点は折れ線グラフにし、1年間の得点推移を把握できるようにしている。それらの書き込みもLHRで行っている。

「生徒が『学力を向上させるためには、何をすればいいのか』を段階的に意識するようになればと考え、そのような形にしました。定期考査や模試で目標を立て、それを確実に達成するスマールステップを積み重ねて、自己肯定感に結び付けること意識しました」(成田先生)

2年生11月には「志望校宣言」を行う。その時点での志望校を決め、志望理由書を書くというものだ。担任が点検し、内容が不十分であれば何度も書き直しをさせ、OKが出た

ら清書する。この宣言を学年団で共有し、日頃の指導に生かす。

「『入試で面接官に話せるくらいきちんと書くように』と指導していった。『真剣に自分と向き合う機会になった』という生徒もいるほど、将来を考える大きなきっかけになっているようです。教師にとっては、『NExplorer』や授業などでのインプットの成果が表れる機会でもあります」(成田先生)

●N.Manager

見開きで1週間分の予定を書き込む手帳。翌週の予定を見ながら家庭学習の計画を立て、実際に行った学習時間を教科ごとに毎日記録し、週末には1週間の振り返りを書いて、担任に提出する。担任は生徒一人ひとりの手帳を点検し、コメントを書いて返却する。手帳に時間目盛りがあるため、時間管理の考え方を学びやすく、また、立案・実行・反省・改善を1週間という短期間で何度も繰り返すことによって、自己管理の術を体得していく。

「実際、生徒自身で学習時間の少なさに気付き、改善・修正していく姿がよく見られます。実行したこと

図2 「N.Assist」定期考査・模試の記録表

上の図は、定期考査の学習記録表だ。試験科目ごとに、目標得点、得点、平均点を書き、試験前には学習の目標を、試験後には反省点や改善点を書く。そして次の考査の目標や学習内容を書き込む。下の図は、模試の記録。定期考査と同じような流れで、目標偏差値、事前の学習内容、結果と反省点・今後の抱負を書く。自己採点を書き込むシートも付いており、試験後はすぐに自己採点をして、模試の復習が出来るようにしている。
*学校資料をそのまま掲載

可視化が課題認識を深め
自己肯定感を高める

に線を引きくなど、自分なりの使い方を
にする生徒もいます」(成田先生)

このように、「NDREAM PLAN」

では、生徒が調べ、考え、書き、教師が内容を点検し、生徒は自分が書いたものや先生のコメントを見て振り返るといって過程を何度も繰り返す仕組みになっている。しかも、志望校検討という大きなPDCAサイクルか

ら、1週間の計画という小さなPDCAサイクルまでを教育活動に組み込み、生徒全員が日常的に経験できるようにしている。

「自分の将来を考えたり、定期調査の結果を振り返ったりすること、生徒が家で1人で行うのはなかなか難しいと思います。授業で行えばきちんと取り組みますし、友だちの考えを知って気付きを得たり、視野が広がったりして、自ら深く考えられるようになるでしょう。実際、生徒に考える習慣が付いてきたと感じています」(八木教頭)

成田先生は、一連の取り組みを通して、「言語化して残す」ことの必要性を実感していると話す。

「例えば、定期調査に向けての目標を設定し、結果を各自で分析し、課題を書いて可視化することで、生徒は次に向けて何を修正すべきかを考えやすくなっているようです。また、進路学習でも、考えを書き残し、次の活動でそれを見ることで、自分が考えてきた過程を振り返りやすくしています。本当にやりたいことは

何か、自分の軸を考えるきっかけになっています」

「NExplorer」「NAssist」は、1冊のファイルに3年間分をまとめて保管。それを見れば、入学時から成績推移や進路への考えなど、自分の変化を振り返ることが出来る。

「入学時からの自分を振り返って、何かに気付いて次の行動につながることもあるでしょうし、その積み重ねが自己肯定感を高めることにもなるでしょう。紆余曲折を経て、いろいろ考え、自分自身をつくっていく。考えるのは生徒自身であり、もの見方を広げさせて、考える環境をつくり、支援するのが我々教師なのです」(八木教頭)

生徒が視野を広げ、考える材料としては、「NData」で先輩の成績推移や合格体験記、大学の情報などを提供し、進路通信である「NReport」では、模試分析や学習時間調査の結果、進路イベントなどの情報を時期に合わせて伝えている。他に、以前から行っている進路ガイダンスや大学の出張講義などを継続している。

把握した生徒情報を基に カンファレンスを実施

「NDREAM PLAN」によって、生徒の考えや状況を正確に把握できるため、面談で何を話すべきか、どのように声を掛けるかなど、生徒一人ひとりに応じた指導がより具体的に的確に、そして素早く出来るようになった。

例えば、模試の結果から予想して「学習時間が少ないのではないか」と言うのではなく、「NManager」で学習時間を把握し、「学習時間はどうか」などと気付きを促せる。手帳に書かれた学習時間は、担任または副担任がパソコンに打ち込み、学級ごと・学年ごとに集計。その結果を進路通信に掲載する。他クラスと比較して発破をかける担任もいる。

学年団が、把握した情報を基に生徒一人ひとりについての指導法を話し合う「カンファレンス」を行うようにもなった。以前は、そうした機会には3年生で受験校を決定する段階での進路志望検討会だけだったが、今

年度は9月までに3年生のカンファレンスを3回開いた。時期や回数などは決めておらず、今年度は3年生で行い、ある程度形になったら、今後1年生や2年生でも行う予定だ。

「カンファレンスで話し合った結果は学年としての指導方針となりますから、経験が浅い教師でも自信を持って指導に当たれるようになりました」(八木教頭)

PDCAの考え方を 他の場面でも使えるように

「NDREAM PLAN」を始めて、今年で2年。生徒の進路意識は以前より高まり、よりたくさん情報を求めて積極的に行動するようになっていく。担任に進路について自ら相談に来る生徒や、大学の合同説明会に参加する生徒が増えている他、2年生の『志望校宣言』では、それまでの進路学習でよく考えられているからか、下書きのチェックが一度で済む生徒が少なくないという。

同校では、学園祭やスポーツフェスティバルなどの行事を生徒が企

画・運営し、修学旅行ではグループで計画・行動する自主研修の日を設ける。部活動も加入率が高く、生徒は毎日練習に励む。そうした様々な活動でも「N.DREAM PLAN」での学びを生かして「考動力」や自己管理能力、自己肯定感を高めることを期待している。

今後の課題の1つは、「N.DREAM PLAN」を学校の取り組みとして根付かせることだと、成田先生は言う。

「実施初年度は、年間計画以外に私が週の計画を毎週立て、先生方に配布していました。今年は、学年ごとに担当者を付け、週の計画を出すようにしています。そのように段階的に取り組みを浸透させ、進路指導部の担当者が変わっても、どの先生がどの学年の担任となっても活動が続くようにしたいと考えています」
八木教頭もこれからの展開を次のように話す。

「生徒には最初にPDCAサイクルの考え方を説明しましたが、そう簡単に意識できるものでもありません。将来にわたって必要な力を育む取り組みとして粘り強く継続していきたいと思います」

様々なツールを活用し 生徒に気付きや修正を促す 指導を徹底

聖セシリア女子中学・高校は、「学習、体験、活動、思索」を深めていく中で、生徒が自ら修正点に気付き、行動できるよう、面談や声掛けを重視している。教師が適切な声掛けをするために、学習計画表などで生徒の状況を把握すると共に、教師それぞれの気付きを学年団、学校全体で共有する仕組みも整えている。

失敗を逃さず、生徒が気付き、 軌道修正する場

神奈川県にある聖セシリア女子中学・高校は、カトリック精神に基づく全人教育を基盤とした私立の中高一貫校だ。「学習、体験、活動、思索」の4つの教育目標を掲げ、21世紀をたくましく生きるための心と力の育成を目指している。

変化の激しい社会を生き抜くために生徒が修正力を身に付けることは、同校でも課題の1つとして捉える。進路指導部長の中野路子先生は生徒の特徴を次のように話す。

「与えられたもの、言われたこと

養っていく。
例えば、生徒が企画・運営する青葉祭（学校祭）では、実行委員の連絡が行きわたらず、各学級が実行委員の意図しない方向に動き始めることがある。その時、教師はなぜ失敗したのかを、まず実行委員に考えさせ、根本的な原因に気付かせてから、各学級にフィードバックさせるようにしている。

その時に大切にするのは、教師が答えを教えず、あくまで生徒自身が課題に気付き、自分たちで軌道修正したと思わせることだ。教師は、何がうまくいっていないのかを、生徒に問い掛ける。原因が分かっていたければ、「この方法ならどうだったのか」「別の方法があったかもしれない」というように、少しずつ違う視点を示して考えさせながら問題の本質に迫り、どうすべきかを生徒に答えさせ、行動に移させる。試行錯誤しながらも、自分たちの力で行事を成功に導いたという体験は、自己肯定感にもつながる。

「最初から教師が『こうすれば大丈夫だよ』と教えれば、教師も生徒も楽でしょうし、学校祭は成功する

聖セシリア女子中学・高校

◎ 1929 (昭和4)年に開校。1980年に現校名となる。「よりよく生きること」を考え続ける『ところ』を育成し、それを実現へと導く『力』を養いたい」を教育目標に掲げ、学校を人間形成の場として教育活動を展開する。

◎形態 全日制/普通科/女子

◎生徒数 1学年約120人

◎2014年度入試合格実績(現浪計)

国立大は、岩手大、東京芸術大に2人が合格。私立大は、青山学院大、上智大、法政大、明治大、立教大、早稲田大などに延べ301人が合格。

◎URL <http://www.cecilia.ac.jp>



原野 純 はらの・じゅん
聖セシリア女子中学・高校
教職歴4年。同校に赴任して3年目。入試広報部。「生徒に自由を与えることで、責任を意識させたい」



笠井理弘 かさい・みちひろ
聖セシリア女子中学・高校
教職歴17年。同校に赴任して18年目。教務部長。「生徒が将来幸せになれるよう、授業生徒指導を行う」



中野路子 なかの・みちこ
聖セシリア女子中学・高校
教職歴27年。同校に赴任して28年目。進路指導部長。「種をまき育て続け、生徒の学力・人間力を伸ばす」

かもしれません。しかし、それでは、生徒が成長する機会を奪ってしまうことになります。生徒自身に答えを

見付けさせるためには、教師がアンテナを張り、生徒の変化を察知しながら、根気強く指導し続けることが大切だと考えます」と中野先生は強調する。

学習計画表を日々の課題発見と成長実感に結び付ける

日々の学習で得られる気付きと成長実感も大切にする。特に効果を上げているのが、中学1年生〜高校1年生で行う学習計画表「Recording Study」だ。これは、1週間分の学習計画を立て、実際の学習時間や感想・反省などの達成状況を記入する学習と生活の記録である。家庭学習習慣の定着と進路実績向上を図るために始めたが、生活の課題発見や自己肯定感に結びつくツールとしても機能している。

大きな特徴は、学年を追うごとに徐々に教師が手を放していく仕組みになっていることだ。中学1・2年生では、生活習慣を整えるために、起床から就寝まで1日分の計画を立てるようにしているが、中学3年

図1 「Recording Study」 高校1年生の例

高校1年生の「Recording Study」では、5教科それぞれの学習開始時刻・学習時間・学習内容、1日の合計学習時間を書き記す。毎日記入し、朝のHRで担任に提出。担任は検印と、場合によってはコメントを書き、帰りのHRまでに生徒に返す。記入欄は5教科分あるので、生徒も5教科の学習を意識しやすい。

*学校資料をそのまま掲載

生・高校1年生では学習計画のみとなる(図1)。更に、高校2・3年生では、計画ではなく、事後報告とし

て学習内容・時間の実績だけを記録して担任に提出する。担任が事前に計画を確認し、学習

時間が少なかったり、教科・科目に偏りがあったりした場合は、生徒に助言をし、事後に提出させて達成状況を確認する。担任は必ず目を通して生徒の生活・学習状況を把握し、生徒の変化を早めに察知するように努めている。教務部長の笠井理弘先生は次のように狙いを語る。

「以前は定期考査前に学習計画を立てさせるだけで、しかも学習内容や達成状況を担任が確認することもしていませんでした。生徒は真面目なので、計画をきちんと立てますが、そこに時間を掛けてしまい、肝心の学習がおろそかになることもありました。学習計画とその達成状況を可視化し、生徒自身に何が出来て、何が足りないのかを気付かせると共に、継続的に取り組ませて、日常生活に計画・実行・修正というプロセスを定着させたいと考えました」

低学年では、生徒の気付きを待っているよりも、担任が声を掛けて気付かせることが多い。「学習時間が減っている」「時間が固定していない」という変化が見られれば、担任がすぐに声を掛け、修正させる。それを繰り返すことで、計画を立てる

習慣が身に付き、自分自身を客観的に振り返る視野の広さが身に付くと考えている。実際、学年が上がるにつれて計画を立てる習慣が付き、計画を立てなければ試験に臨めないという生徒が増えるという。

更に、「Recording Study」は、目標を達成したり、修正がうまくいったりしたことも可視化される。教師はそうした点も生徒に気付かせ、自己肯定感に結び付けている。

評定平均値を自分で計算し 目標と現実の差を認識

学習指導でのもう1つの工夫は、「目標と実際の成績」を意識させることだ。同校では高校2年生の時点で、評定平均値と大学合格実績の相関を一覧表にして生徒に示している。2年生は自分で1年生での評定平均値を算出し、志望目標を達成するために2年生でどの程度上乗せが必要なのかを計算する。「漠然とゴールを目指すのではなく、志望を実現するには、具体的な目標を設定し、何をすべきなのかを意識させたいのです」と、2学年担任の原野純先生は語る。

「評定平均値は3年間の取り組みの総合評価となります。高校1年生で目標に対して十分な成績が取れていないのなら、2・3年生で挽回すればよいのです。また、どの教科が出来ていて、どの教科が出来ていないのかを確認して対策を考えることを意識する必要があります。志望と現状をしっかりと認識して、学習法や生活態度を修正するきっかけにしてほしいと考えています」

生徒が計算した評定平均値は、担任の面談資料にもなる。生徒がきちんと評定を把握しているのか、志望と目標のずれはないのかを面談を通して確認し、気付いていなければアドバイスし、修正させる。生徒は各教科・科目の目標を設定し、通常の学習計画やテスト対策などに反映させる。

「大きい目標だけでは漠然と進んでいくだけ。そのためにどれだけの努力が必要なのかを見極めさせながら、1つひとつ課題をつぶしていくことが学力を向上させると共に、気付き力高め、修正力を養うことにもつながると期待しています」（原野先生）

職員室を1室にし 日常的な情報共有を図る

生徒に気付きを促すような声掛けをしていくためには、教師間における生徒情報の共有も重要となる。

情報共有を円滑に行うための工夫の1つは、職員室の配置にある。以前は中学校と高校の職員室は別々だったが、数年前の校舎改築を機に1フロアにまとめた。

「本校では以前から職員会議での生徒情報の共有は活発でしたが、会議という改まった場よりも、日常会話の中に指導のヒントが隠れていることが多いという意見から、学年に関係なく、教師間の交流がスムーズに行えるよう、職員室を1室にまとめました。中高の壁が取り払われたことで、発達段階に応じた指導の違いも見えてきて、生徒把握が格段に進みました」（笠井先生）

質問や相談で職員室を訪れる生徒も多い。職員室の中央通路はいつも生徒でごったがえし、昼休みなどは通り抜けるのも難しいほどだ。そのような生徒と教師の距離の近さも、教師の生徒把握を容易にしている。

ICTを導入し あらゆる場面で個別指導を

生徒理解のためのもう1つのポイントは、ICTを活用した生徒情報の共有である。同校が活用するシステムは、ベネッセの「授業・学校支援サービス」だ。生徒一人ひとりの模試や定期考査、小テストなどの成績、学習時間や内容、出欠管理、生徒の授業評価の集計、行事や部活動の実績など、幅広い情報をデータで管理し、学校全体で共有している(図2)。2014年度に試行的に導入し、15年度から本格的に活用していく予定だ。

「これまで各教科の提出物の状況や小テストの結果などは、教科担当が一定期間内に集計し、担任にフィードバックして、指導が必要な生徒の情報を共有していました。システム導入後は、そうした集計結果がリアルタイムで見られるようになります。担任はホームルーム以外でも生徒の様子を把握できるため、より深い生徒理解が可能になると期待

しています」(笠井先生)

生徒の志望校の情報も共有できるため、教科担当の視点から「この生徒ならもっと高いところを目指せる」といった会話を日常的に交わすことも可能になる。これまでは担任が教科担当に相談して、生徒の力量や課題を1つひとつ把握していたが、そうした情報交換がより効率的に行えるようになる。

システム導入を決めた背景には、個別指導の重要性への認識がある。

「生徒が自身の実力や課題にどこで気付くのかは、一人ひとり異なります。生徒たちの成長を促すためには、学校生活のあらゆる場面で個別指導を徹底することが重要です。教師は生徒一人ひとりを多面的に捉え、その情報を共有することで、様々な角度からアドバイス、応援、励ましの声掛けをして、気付きを与えていきたいと思っています」(中野先生)

失敗経験を含めて もつと試行錯誤させる場を

学習計画や個別指導の徹底などに

よって、学力の底上げ、進学実績の向上が見られたのは、ここ数年の大きな成果だ。中学2年生や高校1年

生の時に成績が下がることが毎年課題であったが、14年度、初めて中学2年生の成績が下げ止まった。更に、

聖セシリア女子中学・高校では、「授業・学校支援サービス」を活用して、生徒一人ひとりの情報を集約している。「近況」「指導履歴」「進路」「成績」「基本情報」の5項目があり、面談時、生徒に細かな情報の確認をしなくても、これを見ながら話を進めることが出来る。また、その面談の内容も、指導履歴に残すことが出来るため、前回の内容を振り返りながら、話を深めていきやすいという。
*学校資料をそのまま掲載

図2 「授業・学校支援サービス」の記入例



長年、同校が目標に掲げてきた「難関大合格率40%」という進学実績も達成した。

教師の意識も変化している。

「次年度の『授業・学校支援サービス』の全面導入を見据え、教師全員が少なくともパソコンを、またタブレットも一部使用するようになったのは大きな前進です。また、好調な進学実績の背後には個別指導があることに気付く教師も多く、面談などに力を入れる姿が見られます。次年度以降、ICTが更に有効に活用されることを期待しています」（中野先生）

今後の課題は、生徒自身がより主体的に課題を見付け、修正していく力を高めていくことだ。

「例えば、学習計画においても、教師が先回りして修正を加える場面がまだ見られます。失敗経験を含めて、生徒が幅広い視野で自分を見つめて、考える場面を与え続けること、その結果を教師が共有して、生徒の成長につながる効果的な声掛けをしていく体制を築いていくことが、ますます重要になると思っています」（笠井先生）

長崎県立長崎西高校

教育方針・生徒把握を徹底共有し

自律を育む活動を全校で推進

「志高く、夢かなう長崎西」をキャッチフレーズとして、生徒の可能性を広げる指導を展開する長崎県立長崎西高校。校訓である「自律」した人間の育成を目指し、全ての生徒に指導方針を浸透させ、学年団では常に生徒の状況を共有し、生徒に考えさせ、気付きを促し、自ら修正していく指導を行う。

卒業時の自律した姿を入学時から生徒に伝える

長崎県立長崎西高校は、国公立大に毎年250人以上が合格する九州を代表する進学校だ。2014年度入試では、目標である2桁に届かなかった東京大合格者が14人という躍進を遂げた。普通クラス、理系クラスに加え、2011年度には、3年生に「東大クラス」を設置。東京大を第1志望に掲げる生徒を学力や文理に関係なく1クラスにまとめ、全校体制で学力・精神の両面で生徒を鍛え上げ、最後まで目標を諦めない指導を徹底してきた結果だった。統

括主任の野村雄大先生は、その背景にある同校の教育方針について次のように語る。

「本校が目指すのは、日本や世界の平和と発展に貢献していく人間の育成ですが、目の前の壁に歯を食いしばって立ち向かい、自らの力で打ち破って前に進めるような人間こそが、社会に真に貢献できると考えます。しかし、本校の生徒は、優秀であるが故に、中学時代まで叱られることや失敗したという経験があまりありません。力のある生徒たちの可能性や夢を更に広げるためにも、志を高く掲げて何事にも取り組ませ、そこで壁にぶち当たっても厳しく鍛

図1 長崎西高校が目指す「生徒に育てたい力」



えて伸ばし、3年間で校訓でもある『自律』した人間へと育むことが、本校の教育の土台にあります」

10年後の社会がどのようなようになっていくのか分からないからこそ、確固とした基礎学力と心豊かであつた人間力が必要であるという考えを図にして(図1)、生徒全員に配布する「進路のしおり」に掲載。入学直後の新入生合宿では、なぜそうした力が必要なのかを説明し、卒業までに自律した人間になることが目標

長崎県立長崎西高校

◎日本や世界の平和と発展に貢献するために、学力・体力・文化力を併せ持つ心豊かでたくましい人間の育成を図る。普通クラス、理系コース、東大クラスを設ける。2005年度からスーパーサイエンスハイスクールの指定校。

◎形態 全日制/普通科/共学

◎生徒数 1・2学年各280人、3学年307人

◎2014年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東京大、京都大、大阪大、九州大、長崎大などに265人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大などに延べ240人が合格。

◎URL <http://www.nagasaki-nishi.ed.jp>



長崎県立長崎西高校
副島俊彦 **そえじま・としひこ**
教職歴14年。同校に赴任して4年目。進路指導部副主任。「生徒を信じて粘り強く行動し続ける」



長崎県立長崎西高校
堀光 **ほり・ひかる**
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「生徒一人ひとりの可能性を信じる」



長崎県立長崎西高校
野村雄大 **のむら・たけひろ**
教職歴24年。同校に赴任して12年目。統括主任。「人生の基礎の一端を高校3年間で築いてほしい」

であると明言する。生徒がその目標を実感する機会は、西高祭や運動会、部活動などだ。学年横断で活動する

中で、先輩が自ら考えて行動し、交渉したり工夫したりする姿を見て、憧れを抱き、自分もそうなりたいたい、学校生活に力を尽くすようになる。

教育方針の共有は、教師間でも常に行っている。進路指導主事の堀光先生は、その重要性をこう話す。

「本校赴任1年目でも本校の教師として指導できるよう、前期・後期報告会や職員会議など教育方針や他学年の活動状況を共有する機会が多くあります。1・2年生の指導が3年生でどう生きてくるのかも分かり、卒業時までどのような生徒に育てるのかを、1年生からイメージして指導しています。ですから、教育方針と指導状況を照らし合わせて、『今の指導を続けてよい』『ここは修正しよう』と考えられるのです」

自律を体現する場を日常生活や行事に設ける

かつては、自律を「何でも自由」とはき違えた意味に捉え、容儀は自由、受けたい大学をそのまま受けるという生徒を、教師が容認していた

時期があった。しかし、「生徒指導の充実」を根幹に据え、1年生ではあるべき姿を教え、部活動で中心を担うようになる2年生で少しずつ手を離し、3年生で行事等の運営を任せていくというのが、3年間の指導ストーリーだ。進路指導部副主任の副島俊彦先生は説明する。

「本校が目指す人間像にふさわしくない言動は、厳しく叱り、なぜ駄目なのか、どうすればよいのかを諭し、考えさせます。1年生から繰り返し粘り強く指導し、また多くの人の話を聞く中で、それが社会で求められる姿なのだと徐々に理解し、3年生になれば納得して自ら動くようになります」

生徒の自律した姿が最もよく表れるのが、9月に行われる運動会だ。学年縦割りの4チームによる対抗戦で、組体操やパネルなど、種目ごとに学年混合のチームを作り、3年生が練習や準備を率いる(図2)。

「運動会は種目が多く、普段は目立たなくても力のある多くの生徒たちがリーダーを担って活躍します。

図2 自律を体現する取り組み

●西高祭

毎年8月実施。文化部および同好会が1年間の活動の成果を発表すると共に、1・2年生の各学級がそれぞれ工夫を凝らした催しを行う。学級の団結力を高める行事の1つ。

●運動会

毎年9月実施。学年横断で4チームに分かれ、3年生をリーダーに各チーム趣向を凝らした熱戦が繰り広げられる。2年生の「西高パレード」、3年生の「もしも教師でなかったら…」は、同校独自のユニークな種目として、その伝統が受け継がれている。

自のユニークな種目として、その伝統が受け継がれている。



●無言清掃

毎日6時間目終了後、音楽が流れる3分間で持ち場に移動し、12分間無言で掃除に取り組む。同じ持ち場の生徒と

も原則的に話さないため、周りの様子を見ながら、自分で掃除が必要などころに気付いて行うという意識が求められる。美化意識を高めると共に、集中して取り組みば作業効率が高まることを体感する場でもある。

●携帯電話マナー4原則

ホームルーム委員会が中心となり、携帯電話に関して次の4項目を決めた。
①校内持ち込みの禁止、②夜9時以降使用しない、③1日の使用は30分以内、④公共交通機関、歩行中の使用禁止。

3年生は、教師の助言を参考に、自分たちだけの力でやり遂げるという意欲を強く持ち、また、後輩に見られていることを常に意識して行動しています。勝ちたい、運動会を盛り上げたい。そのためにはどうすればよいかを話し合い、試行錯誤している姿には頼もしさを感じます。生徒が自己肯定感を最も得られる機会の1つでもあります」(副島先生)

生徒が自律を体現する取り組みは他にもある。「全校・学年集会時の無言集合・整列・解散」「無言清掃」「ワンストップ挨拶」「西高生の携帯電話マナー4原則」などである。

「無言清掃を始めて3年目ですが、活動は根付き、時間になると生徒は黙々と清掃します。細かい汚れに気付く生徒もいて、驚かされることもしばしばです。また、生徒は急いでも立ち止まって挨拶します。教師が生徒から学ぶべきことは多く、そうした姿を褒め、他の先生とも共有するようにしています」(堀先生)

粘り強く頑張った過程を残し 自己肯定感にも結び付ける

学習指導でも、生徒が自ら取り組

めるような工夫をする。その1つが、定期考査2週間前に配布する各教科・科目の出題分野一覧表だ(図3)。生徒は取り組んだ分野を塗り、進捗を確認しながら学習を進める。

「この表があれば、生徒は試験までの自分の予定を考慮して学習計画を立てられます。担任も『部活動の遠征があるから早めに取り組んだ方がよい』などと、生徒個々に応じた声掛けをしています」(野村先生)

試験後は用紙を担任に提出。担任は、塗ったコマ数と試験の得点との相関を見る。全部塗ってあるのに得点が思わしくなければ、学習方法に問題があると分かる。全て塗っていないでも高得点であれば、しっかり学習することで学力向上が期待できる。そのように分析した結果を面談の材料にし、生徒の学習方法の修正や意欲向上に結び付ける。

生徒が学習方法を修正する機会として最も活用するのは、定期考査と校外模試だ。教科・科目別にノート

図3 定期考査の出題分野一覧表 (2年生1学期の期末考査)

学年・コースごとに「出題分野の一覧表」を作り、定期考査の2週間前に配布する。以前は試験1週間前に配布していたが、生徒の希望により2週間前となった。教師側も試験日を見据えて配布後の授業を進めるようになり、生徒・教師双方にとって計画性を身に付ける機会となっている。

*学校資料をそのまま掲載

を用意し、間違えた問題を再度解き、どこでどうつまづいたのか、ポイントとなる点を書き込む。

そうした復習を徹底させているのが、3年生で夏・秋各3回行われる東京大入試対応模試だ。東大クラスの生徒は全員受験するが、テスト終了後に答案をコピーし、すぐに各教科担当が採点する。生徒は、その全教科・科目の結果を1冊のノートに貼って1問ずつ解き直し、気付きや改善点を書き込む。そのノートを各

教科担当が見て、良い気付きには下線を引くなどしてコメントを書き、最後に校長が激励の言葉を記して返却する。更に、業者採点の返却後、成績一覧表で自分の位置を確認する。

「東大クラスでは東大入試に特化した演習を行っていますので、授業で取り組んだ演習の類似問題が模試に出ることがあります。そうした指摘を生徒にして、普段の学習の大切さに気付かせています。更に、教師の模範解答と業者の模範解答とを見

比べて、解法は1つではないと気付かせ、多角的な視点を育成することも狙いとされています」(副島先生)

14年度は、東大クラスの生徒全員にビジネス手帳を配布した。日々の学習事項を書き記し、日々の生活や学習方法の軌道修正に役立てると共に、くじけそうになった時に手帳を見て、自分の努力を振り返り、気持ちを立て直すことが出来る重要なツールになると考えたからと、堀先生は言う。

「私たちは、生徒を褒めるだけでなく、『君たちの力ならもつと出来る』と言ひ、悔しい思いを向上心に結び付けるといふ指導をしています。歯を食いしばって頑張ってきたことを自己肯定できるように、手帳を見て、『今週は先週に比べて頑張った』、入試前に『1年間これだけ努力した』と実感できる機会になればと思います」

情報を共有して 隙間を埋め、一枚岩となる

同校では、厳しく指導するが故に、

教師間で生徒の情報を常に共有し、一人ひとりの状況に応じた指導を心掛けています。例えば、1年生では、教科共通で課題提出日を設定し、締め切りを徹底的に守らせている。締め切り日までに提出していない生徒を教科ごとに一覧表にし、学年団がそれをまとめて、生徒ごとの提出状況を把握するが、提出していない教科がいくつかあれば、それは単に忘れていただけなので、生徒を呼び出して厳しく指導する。一方で、もし全教科未提出であれば、何か問題があったのではないかと考え、生徒と面談するなどの対応を講じる。

「担任や教科担当など複数の目で生徒を見て得た情報を共有しているからこそ、生徒の変化を察知し、どう対応すべきか、学年団として判断できます。また、例えば提出状況があまりにも悪く、部活動を休ませて、放課後に取り組ませようとした場合でも、それは学年団の判断として、部の顧問から理解を得られやすいという面もあります」(副島先生)

3年生では、生徒の情報を共有す

る場として「進路検討会」や月1回の「東大クラス担当者会議」を開く。担任の方針はプリントにまとめて配布し、会では教科担当が授業等で気付いたことを話し、担任が指導の材料を得る場になっている。

「担任1人では生徒の見えない部分はどうしても出てきます。その隙間を埋めるのが検討会です。順調に進んでいると思っていた生徒に対して、修正すべき点が多いと他の先生が言うこともありますし、生徒の良い面を指摘されることもあります。自分の所感を率直に話せるような教師間の信頼関係を築いておくことは、生徒の成長や課題に対応した指導を行うためにも重要です」(堀先生)

教師の本気が 生徒の考えを深める

丁寧な生徒把握は面談に生きてくる。どの学年も面談週間が年6〜9回設定され、それ以外にも担任が適宜行う。担任が、学力、伸びしろ、性格、精神状態など、様々な教師か

ら聞いた情報を基に説得力を持った話をするため、生徒もより自分を見つめることが出来る。野村先生は、ある卒業生の言葉が印象に残っていると話す。

「現役では東京大に不合格で、1浪で大阪大に進学した卒業生が、『先生と何度も話し、自分でも一生懸命に考えたから、第1志望ではなくても大学生活が楽しい』と言ったのです。悩み、つまずき、教師の言葉に気付かされ、そうして考え抜いて決めた経験が、その後の人生でも生きていき、いつかまた壁にぶち当たっても必ず乗り越えていってくれると信じています」

教師が本気で接することが、生徒に内省を促すのだろう。

「私たちは生徒に高い目標を示し、厳しい指導をしますが、それは生徒が自らの潜在能力に気付き、それを開花させ、大きく成長してほしいからです。教師側も、生徒の変化に敏感に気付き、生徒の心に訴え掛けられるような指導をしていきたいと思っています」(堀先生)

2年生に対する 受験生への切り替え指導

数学や理科の学習内容が増えた新課程では、
どの時期に、どのような指導によって、
生徒を受験生に切り替えさせればよいのだろうか。

岡山県立倉敷青陵高校と、佐賀県立致遠館中学・高校に、
現3年生にどのような指導を行ったのかを聞いた。

学校事例 1

岡山県立倉敷青陵高校

学年集会や模試活用などで

2年生2学期から受験生の自覚を促す

「併願パターン研究」で
入試を意識させる

岡山県立倉敷青陵高校は、東京
大や京都大などの国立大に毎年
200人以上が合格する進学校だ。
受験生への切り替え時期を2年生
1月～3年生9月と捉え、模試、学
年集会、進路通信、面談などを通し
て、生徒に断続的に受験生として
の自覚を促す。受験に向けてスター
トを切る生徒が学級に数人でも出
てくれば、それに触発されて学習
を始める生徒が増えると、進路指
導課長の三村美紀先生は話す。

「本校では、受験は団体戦として
取り組んでいます。9月第1週の
青陵祭で完全燃焼すると、放課後
に居残り勉強をする3年生がぐっ
と増え、受験勉強一色の雰囲気と

なります。それまでに、互いに切磋
琢磨し合って頑張る集団となるよ
う、様々な働き掛けをしています」

受験生への切り替え指導の端緒
となるのは2年生9月、青陵祭直
後に開く学年集会だ。進路指導課
主任の田野雅人先生は、「青陵祭
では、学年縦割りでチームを組み、
3学年合同で練習を行います。準備
に熱を上げる3年生も、練習後は
学校に残り、自習をします。2年
生はそうした先輩たちの姿を見て、
翌年の自分の姿をイメージします。
そのような刺激を受けている時に
すかさず、教師が入試の具体的な
話をし、入試を自分のことと考え
させるようにしています」と説明
する。

学年集会では、入試までの流れ、
短期的な目標となる模試のスケ

図 「併願パターン研究」

入試日程やセンター試験・個別学力試験の配点を調べ、模試の偏差値を基に合格可能性を算出させて、「チャレンジ校」「実力相応校」「合格確実校」を考えさせる。センター試験の出来によって出願校が変わるため、難易度の異なる大学群を考えておく重要性、思い込みではなく視野を広げる大切さを説く。
*学校資料をそのまま掲載

ジュールなどを示しながら学習の進め方を説明する。この時のメインは「併願パターン研究」だ。2年生7月の模試の結果を基に、国立大の併願パターンを考えさせる(図)。進路指導課で3学年担任の岡本崇志先生は次のように話す。「2年生からセンター試験の結果を想定した出願校を考えさせ、憧

れの大学ばかりが頭にある生徒の視野を広げることを狙いとしています。進路通信でも、いろいろな大学について、難易度だけでなく研究内容なども紹介しています」

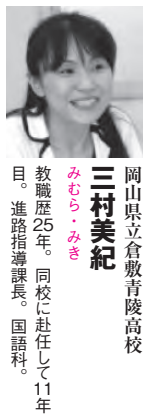
理科は補習や土曜講座で1年生から意識付け

5教科の学習を意識させるのも、2年生2学期だ。宿題は、それまで課していた国数英の量は減らさずに、2年生9月から理科と地歴・公民を加える。授業内容の定着はもちろん、5教科を学習する習慣を身に付け、学習の総量を増やすことも狙いだ。また、「併願パターン研究」では各科目の配点も調べさせ、自分の得意・苦手をどう生かして今後の学習を進めるか、5教科全体で考える機会にしている。それらに加え、新課程先行実施生である現3年生では、早い時期から特に理科の学習の意識付けを行ってきた。長期休業中の補習では、1年生から3教科以外に理科も行い、年5回の実力考査では、2年生で「化学基礎」「生物基礎」を加えた。更に、2年生2学期から

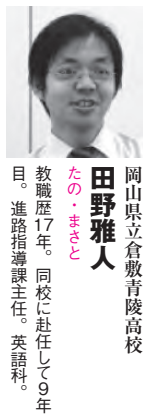
模試を活用し生徒の自律した学習を促す

受験生への切り替えの次の山場は3年生4月だ。最難関大志望者の教科別支援チームが3学年の担当教員を中心に結成され、生徒に入試本番までの講座や添削指導などの支援内容を説明した。「難関大志望者対象の集会を1年生から度々開き、心構えや学習法を伝えると共に、同じ志の生徒が顔見知りになるようにしてきました。3年生4月に最難関大を目指す生徒を改めて集め、学校が全面的に支援することを伝え、生徒・教員が1つのチームとして意識が高まるようにしました」(田野先生)

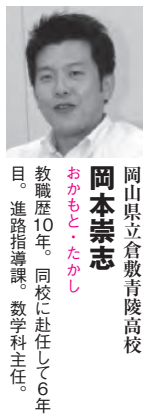
は土曜講座で理科の講座を設けた。「進度が厳しいと感じた理科の担当教員から、夏休みの補習や土曜講座を行いたいと言われました。私も2年生11月進研模試の結果を見て、理科がどの層も過年度より偏差値が2〜4ポイント下がっていることに驚き、学年集会で特に理系の生徒は早めに対策を始めた方がよいと伝えました」(岡本先生)



岡山県立倉敷青陵高校 三村美紀
みむら・みき
教職歴25年。同校に赴任して11年目。進路指導課長。国語科。



岡山県立倉敷青陵高校 田野雅人
たの・まさと
教職歴17年。同校に赴任して9年目。進路指導課主任。英語科。



岡山県立倉敷青陵高校 岡本崇志
おかもと・たかし
教職歴10年。同校に赴任して6年目。進路指導課。数学科主任。

◎創立106年の伝統校。「大きな夢を持つ人を応援します」などの教育目標を「青陵宣言」に掲げ、生徒の進路実現を支援する。◎全日制／普通科／共学／1学年約320人◎14年度入試合格実績(現浪計)／国立公立大は、東京大、京都大、岡山大などに236人が合格。私立大は、同志社大、立命館大などに延べ367人が合格。

また、新課程入試に向けて、2年生までの5教科の学習内容の定着度を早期に把握するため、初めて3年生4月に進研模試を行った。「数学や理科の定着度が気になっていましたが、予想通り、理科の成績が全般的に低調でした。ただ、全国の学校も同様の状況であり、集会でそれを生徒に伝え、いち早くスタートを切った者が合格に近づくと強調しました」(岡本先生)
4月の模試の結果返却は、大半

佐賀県立致遠館中学・高校

模試データを継続的に活用し
徐々に受験への意識を高めていく

2年生夏休み明けから
断続的に働き掛ける

でも意識は急に変わりません。2年生から断続的に働き掛け、一段ずつ高めていくように指導します」

例年100人以上が国公立大に

合格する佐賀県立致遠館中学・高校は、2003年に中高一貫校となり、7割弱の生徒が併設中学校から進学する。進路指導主事の吉山耕一郎先生はこう語る。

「伸びる素地は大きいものの、高校受験を経験していないからか、『何とかなるだろう』と気長に構え過ぎる面があります。そのため、進路指導では『自分から動かないと何も変わらない』という意識を持たせることを大切にしています」

受験生への意識の切り替えは、2年生の夏休み後に始まる。3学年主任の尊田和寿先生はこう話す。

「『今日から頑張らなさい』と言っ



佐賀県立致遠館中学・高校
吉山耕一郎
よしやま こういちろう
教職歴29年。同校に赴任して7年目。進路指導主事、数学担当。



佐賀県立致遠館中学・高校
尊田和寿
そんだ かずひさ
教職歴20年。同校に赴任して11年目。3学年主任、生物担当。



佐賀県立致遠館中学・高校
平方伸之
ひらかた のぶゆき
教職歴15年。同校に赴任して11年目。2学年主任、物理担当。

◎校名の由来は佐賀藩校「致遠館」。県内唯一の理数科設置校。2006年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校。◎全日制／普通科・理数科／共学／1学年約240人◎14年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東京大、京都大、九州大、早稲田などに138人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ478人が合格。

2年生の9月初旬に担任や教科担当による進路指導連絡会を開き、生活や学力における学年全体の傾向や課題を把握し、今後の指導方針を共有する。それを受け、担任は生徒一人ひとりの志望状況や模試の結果などを踏まえて面談をし、目標と課題を明確にさせる。その後は、定期的な学年集会、進学講演会や大学説明会、SSH校外研修など、進路を考える機会を多く設けて目標への意識を維持させる。

多くの生徒が受験勉強に本腰を入れるのは、高校総体後の3年生6月だ。この時期には保護者会を開き、保護者の意識も受験に向かわせる。そして、夏休み前に「こ

の夏が勝負を決める」と発破を掛け、勉強合宿やオープンキャンパスへの参加などを通して学習意欲を更に高め、9月の体育大会後には生徒全員が完全に受験に向かう状態を目指している。

模試や添削指導を利用し
受験への意識を維持

進路指導で継続的に活用するのが模試データだ。模試の結果が返却される度に面談を行い、生徒に

現状と向き合わせる。

「結果に一喜一憂して終わるのでなく、志望校と自分との距離を意識させ、『次の模試ではここまで頑張ろう』などと短期目標を持たせます。それを1つひとつ達成することに、徐々に自信を高め、自ら学習に向かう意欲を育みたいと考えています」(尊田先生)

例年、高校総体前は学習意欲が落ちやすかったため、現3年生では、2年生2月のマーク式模試から間を空けずに、4月に進研模試を初めて実施した。それにより、受験意識を保ったまま、高校総体を経て、良い状態で夏休みを迎えられたという。2年生後半に始まる国数英の添削指導も、学力向上に加え、受験意識の維持を目的としている。主に学力上位層の集団を引き上げ、全体への波及効果を狙う。

現3年生の指導が例年と違った点には、理科の扱いがある。理科の定着度にやや課題が見られたため、主に新課程で内容変更が大きかった生物で、2年生2学期から演習を組み込んだと尊田先生は話す。

「授業の進度はやや遅れました

が、十分に理解させながら進めることを優先しました。その分、3年生では進度を少し速めました」

2年生前半までは国数英を中心に進め、模試が5教科となる2年生後半から理科の学習を促すという基本方針は変えなかったが、新課程となる理科は、例年より早めに取り組むように伝えた。ただ、理科の課題の開始時期や量は、他教科とのバランスを考慮し、旧課程から大きくは変更しなかった。

教師自ら模試を分析し その結果を指導改善に生かす

次に現2年生の指導を見ていく。

夏休みのオープンキャンパスには、例年、教師が引率して参加していたが、今年は生徒が個別に参加するように指導した。2学年主任の平方伸之先生は、「志望校のオープンキャンパスの日程を自分で調べ、自分の力で行くことで、覚悟や自覚が促され、目標意識が高まると考えました。生徒は九州だけでなく、東京大や神戸大など遠方の大学のオープンキャンパスにも参加していました」と話す。

同校では、生徒が受験に向かっ

て互いに高め合う集団づくりのため、2年生から成績などを総合的に判断し、2学級(80人)を「グレードクラス」として編成。難関大を目指す生徒が切磋琢磨して伸びていく環境を整えている。現2年生では、その良い面をより引き出すため、新たな取り組みとして、夏休みに志望校群ごとに3グループに分けて学習会を実施した。

「『グレードクラス』の目的は、学力上位層を引っ張ることで、中・下位層を刺激して全体的な底上げを図ることにあります。しかし、そこに入れなかった生徒が意欲を失ったり、クラスに入ったもの付いていけない生徒が出たりすると、学力の二極化が生じる可能性もあります。そこで、3グループに分け、それぞれの集団で高め合えるようにしました」(平方先生)

若手教師が比較的多い現2学年団では、生徒の学力や入試問題を分析する教師の力を高めようと、模試が実施される度に学力層ごとに正解すべき問題などを教師が分析。模試の結果が届いたら、分析

通りであったかを確認している。

「模試の分析結果は学年団で共有し、担当教科にかかわらず生徒に助言できる状態を目指しています。例えば、数学の教師から『もう少し英語も頑張りなさい』と声を掛けられたら、生徒は学年全体に見守られていると実感し、学習意欲を高められるからです」(平方先生)

模試の分析は、教師の自信にもつながると考えている。

「自分の分析通りの結果だった場合はもちろん自信になりますが、そうでなかったとしても、自身の指導と生徒の現状とのギャップが明確になるため、指導改善に生かします」(平方先生)

今後は、現3年生の状況を見ながら、現2年生への指導にも臨機応変に対応していく考えだ。

「指導の流れは基本的に例年と大きく変わりませんが、新課程で学ぶ量が増加したことによる定着度の低下には注意が必要です。学力層別にこまめに定着度を確認するだけでなく、生徒の気質も十分に考慮し、生徒の可能性を引き出していききたいと思います」(吉山先生)



秋田県立
花輪高校

キャリア教育

振り返りと評価指標を重視したキャリア教育で社会人に求められる力を育む

◎1926(大正15)年、花輪町立花輪実科高等女学校として開校。48年に男女共学となり、現校名に改称した。校訓は「誠実・友和・創造・英気」。「部活の花輪」といわれ、特にスキー部、陸上部は全国大会で活躍する強豪である。

設立	1926(大正15)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約145人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北見工業大、弘前大、岩手大、秋田大、山形大、茨城大、新潟大、釧路公立大、青森公立大、岩手県立大、秋田県立大、宮城大などに22人が合格。私立大は、北海学園大、弘前医療福祉大、盛岡大、秋田看護福祉大、東海大、早稲田大などに延べ41人が合格。
住所	〒018-5201 秋田県鹿角市花輪字明堂長根12
電話	0186-23-2126
Web Site	http://www.hanawa-h.akita-pref.ed.jp/

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎少子化の影響で全入の状態が続き、成績上位層の生徒も減少。県の指定を受けて本格的なキャリア教育に着手する</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎キャリア教育を体系化し、実効性のある活動に。振り返りや評価指標の工夫によって、生徒に成長実感を持たせた</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎評価指標の結果を指導改善に生かすノウハウが確立。キャリア教育の要素を取り入れた授業改善も進め、生徒の学習意欲を高める</p> <p>STEP 3</p>
--	--	---

県の指定を受けて本格的なキャリア教育に着手

秋田県立花輪高校は、秋田県北東部に位置する鹿角市にある地域の中核校だ。卒業生の進路は、国公立大進学から就職まで幅広い。半数が大学・短大に進学する一方、高い学力を持ちながら地元で公務員を目指す生徒もいる。

進学指導に対する地域からの期待は高いが、少子化の影響により、ここ数年、全入の状態が続き、更に難関大進学を目指す生徒が近隣の進学校に入学する傾向にある。進路指導主事の赤坂俊彦先生は次のように話す。

「本校は地域に根差した学校です。鹿角市の未来を担う人材をこの学校から輩出することが、私たち教師の願いです。本校の生徒たちは真面目で素直、言われたことにはきちんと取り組みますが、自信のなさから、いざという時に実力を発揮できないこともありま

す。自信を持つて高い目標に挑戦できる生徒を育てることが、本校に課せられた使命だと考えています」

折しも2012年度、秋田県の「キャリア教育実践モデル校」の指定を受けたことが、同校の転機となった。進学実績の向上と学校活性化の起爆剤としてキャリア教育を位置付け、「チャレンジし続ける人間の育成」をテーマとした学校改革に着手したのである。

キャリア教育を体系化し 活動の狙いを教師・生徒で共有

改革は、「総合的な学習の時間」を中心に行うキャリア教育の体系化から始まった(図)。それまでも社会人講話などの進路行事を行っていたが、取り組みの狙いが明確ではなく、それぞれの活動のつながりもあいまいだった。そこで、12年度、年5回の「針路の日」を設けた。4月は弘前大訪問と進路研究、7月は進学希望者対象の進研模試、就職希望者対象のマナー講



伊藤孝紘 いとう・たかひろ
秋田県立花輪高校
教職歴5年。同校に赴任して4年目。2学年担任。
「自分自身も学習者として、これからも学び続けるべく姿勢を見せていきたい」



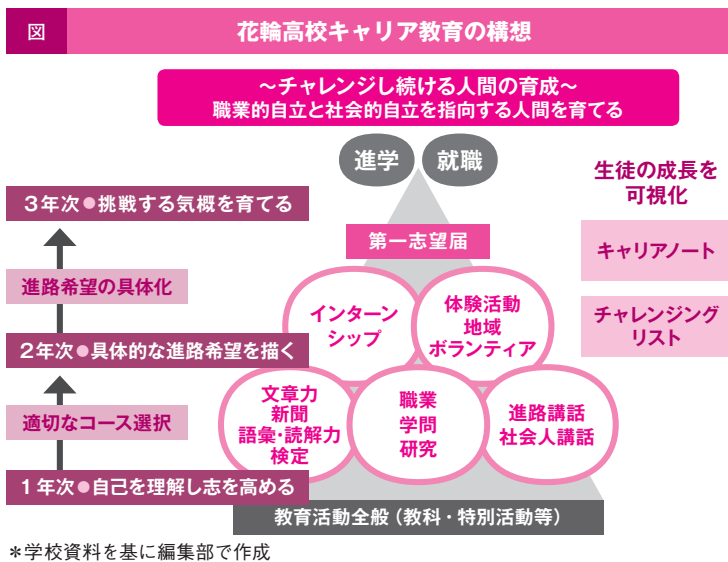
佐藤敦史 さとう・あつし
秋田県立花輪高校
教職歴22年。同校に赴任して9年目。2学年主任。
「思い」だけで終わらせずに、「形」にすることを心掛ける」



大野聡 おの・さとし
秋田県立花輪高校
教職歴26年。同校に赴任して3年目。1学年主任。
「対話し、受けとめ、励ます。否定することから始めない」



赤坂俊彦 あかさか・としひこ
秋田県立花輪高校
教職歴19年。同校に赴任して4年目。進路指導
主事。「この学校で学んだ生徒たちが将来の地域(鹿角市)をつくる」という信念で臨む」



習、8月はスタディーサポート及び就職・公務員試験対策と、年間計画を立て、それぞれ丸1日を充てた。

「意識したのは、取り組みの意味を明確にし、それを教師間で共有することです。どの時期に何をどのような目的でするのかを明らかにすれば、先生方の意欲も高まり、形だけの活動にならないと考えました」(赤坂先生)。例えば、社会人講話は「キャリアアプランニング能力の促進や、自分の将来の姿を本気で考える一助とする」ことを目的に掲げた。この狙い

は、生徒にもしつかり伝える。どのような力を付けるための活動なのかを生徒が理解できれば、自分の成長を実感できると考えたからだ。

更に、全ての進路学習で振り返りの時間を設け、生徒の成長実感により確かなものにしていく。社会人講話の感想、オープンキャンパスの記録、模試や定期考査の成績などは、プリントに記入し、専用ファイル「キャリアノート」に綴じる。プリントの基本フォーマットは校内LANのサーバーに入っており、担任は必要に応じて印刷して生徒に配布する。活用法は担任に任されており、フォーマットの中身を変えてもよい。2学年担任の伊藤孝紘先生はこう話す。

「以前は全てのプリントがまとめられたノートを使っていたのですが、経費の面から14年度は活動ごとにプリントを印刷して配布し、ファイルに綴じるスタイルにしました。ノートの時よりも提出率やチェックの効率が良く、担任の負担軽減につながりました」

活動の振り返りに加え、書く機会を増やして、表現力の向上を図ることもキャリアノートの狙いだ。同校の生徒は、1年生から書く指導を徹底しているため、文章表現をいとわないという。13年度からは、ベネッセの語彙・読解力検定を導入し、社会人として必要な読解力や表現力の育成も図っている。将来的には、推薦・AO入試を見据えた小論文・志望理由書対策にも活用していく考えだ。

「花高チャレンジングリスト」で 社会人として必要な力を定量評価

取り組みの評価を数値で測定し、指導改善に生かしているのも、同校の大きな特徴だ。

秋田県立由利高校のCan-Doリストを参考に、同校独自の要素を加え、生徒の自己評価ツール「花高チャレンジングリスト」を作成した。最大の特徴は、文部科学省がキャリア教育で育成すべき力として提唱する「基礎的・汎用的能力」と関連付けている点だ。キャリア教育に関する評価項目を、大きく「学校生活と人間関係」「学習への取り組み」「進路計画とその実践」「部活動、体験活動、地域とのかかわり」に分け、それぞれ細かい評価項目を設定(全64項目)。更に、その項目1つひとつに基礎的・汎用的能力の4つの力(A人間関係形成・社会形成能力、B自己理解・自己管理能力、C課題対応能力、Dキャリアプランニング能力)を対応させて、どの力がどの程度付いたのかを定量的に測定できるようにした。

これを生徒の自己評価に活用するだけでなく、集計結果を項目別・能力別にグラフ化し、具体的な指導改善に結び付けている。例えば、12年度は、どの学年も人間関係形成と社会形成能力の肯定率はほぼ8割を超えたが、一方で課題対応能力とキャリアプランニング能力の肯定率は6割前後にとどまった。そこで、13年度に

2つの新しい取り組みを導入した。

1つは、「定期考査の前に計画を立て、取り組んでいる」の項目の肯定率が全校で40%と低かったことを受け、定期考査前に学習計画表を作成するようにした。具体的には、教師が用意したフォーマットに、生徒が定期考査に向けた学習計画を記入して提出。担任は1つひとつ確認してアドバイスを書き、適切な計画が立てられるよう支援する。1年間の継続で、13年度の同項目は学校全体で17ポイント、1年生(現2年生)だけでは30ポイントも肯定率が上がった。

もう1つは、1年生3学期に行う「テーマ研究」だ。進路を問わず、1年生全員がそれぞれ関心のあるテーマ、進路にかかわるテーマについて調べ学習を行い、発表する。テーマは「ブレス」「ネイルアート」など趣味にかかわるものから「少子高齢化」「エネルギー資源」などアカデミックなものまで様々だ。学級発表をした後、優秀な生徒を各クラス8人選抜し、2年生の学校祭で発表する。

テーマ研究の狙いは、課題対応能力を身に付けさせることだけにあるのではない。生徒一人ひとりが発表を通して「先生」になり、生徒同士で刺激し合うことにもあると、2学年主任の佐藤敦史先生は強調する。

「本校の近隣には大学がなく、生徒がアカデミックな刺激を受ける機会はほとんどありません。生徒一人ひとりが『リトル教授』に

なり、他の生徒に研究成果を教える機会があれば、大学教員を呼ばなくてもアカデミックな雰囲気を校内でつくれると考えました。また、下級生が発表の様子を見て、関心を深める楽しさを感じてほしいと思います」

今後は3年生前半にもう一度テーマ研究を行い、更に研究を深めさせる予定だ。

地域連携を強化することで 学校の「味方」を増やす

キャリア教育を進める上で同校が大切にしていくのが、地域とのつながりだ。13年度には鹿角市社会福祉協議会と連携し、1人暮らしの高齢者宅を訪問し除雪ボランティアを行った。この年、県の降雪量が多かったこともあり、生徒の除雪作業に泣いて喜ぶ人もいた。取り組みを主導した1学年主任の大野聡先生はこう語る。

「元々はPTAとの懇談会で『学校は地域に何も還元していない』と指摘を受けて始めた取り組みでした。人から感謝されることで、生徒は自分も社会の役に立てるという実感を持つ良い機会になったと思います」

他にも、3年生の就職希望者に年1回、模擬面接を行うが、その際、PTA役員に協力を依頼し、面接官になってもらっている。14年度は9月にPTA役員7人が来校して実施した。教師も面接官を務めるが、教師以外の社会人が相

手となると、生徒の緊張感は全く異なり、本番を想定した練習として大きな効果があるという。

「我々が重視するのは、地域との連携によって生み出される一体感です。地域の人と一緒に何かをすれば、学校の応援者になってくれます。地域連携を強化して以来、住民からの苦情の電話が少なくなりました。鹿角市も少子化で学校の統廃合が現実味を帯びつつあります。本校が生き残るためには、地域を巻き込んで学校との絆を強くすることが、これまで以上に大切になるはずです」(赤坂先生)

社会人として必要な力の育成を教科授業でも目指す

14年度、キャリア教育は通常の授業にも波及した。全教科でアクティブラーニングを取り入れ、課題対応能力・キャリアプランニング能力を中心とした基礎的・汎用的能力の育成を目指している。

「進路学習を増やすのは、教師にとっても負担が大きく、また、14年度で県からの指定も終わるため、予算面も縮小しなければなりません。授業で生徒同士が教え合って理解を深めたり、協同で課題を解決したりする中で、基礎的・汎用的能力の向上と教科学力の向上を両立させたいと考えました」(赤坂先生)

14年4月、アクティブラーニングに詳しい大

情熱 若手教師が語る、指導変革への

自分で納得できる指導を目指し 1年生からの持ち上がりを志願

2学年担任 伊藤孝紘

私の初任校は本校で、1年目は2年生を受け持ち、そのまま3年生に持ち上がりました。最初の2年間は無我夢中で指導に当たり、今も思い返すと、学校に慣れることに精いっぱい、忙しさを理由に流れに身を任せていただけだったように感じます。生徒を卒業させてからも、もっと力を伸ばせた生徒もいたのではないかと、もっと生徒に合った進路があったのではないかと反省ばかりが頭をよぎりました。

自分なりに納得できる指導をしたい。そういう思いから、赴任3年目は1年生の進学クラスの担任を受け持ちたいという希望を出し、かなえていただきました。それからは、3年後の進路選択までを見通した指導を行うように心掛けています。

本校の良さは、ベテラン教師と若手教師がバランスよく在籍していることだと思います。分からないことは先輩がアドバイスしてくれます。新しいことをやろうと考えた時に一緒になって動いてくれる若手教師も多く、自分の力を磨くには絶好の環境だと思います。

今後の課題は、アクティブラーニングを通して、大学入試に通用する英語力を身に付けさせることです。そして、何よりも、高校在学中にコミュニケーションの手段としての英語を習得できるよう、生徒のキャリア形成をサポートしていくつもりです。1人でも多くの生徒が志望を実現できるよう、精いっぱい指導に打ち込んでいきたいと思っています。

学教員を招いて研修を実施。以来、全教科でアクティブラーニングを取り入れようと試行している。物理では授業の約半分が生徒同士の対話や活動になった。地歴・公民ではタブレットを使ったデイスカッション中心の授業が浸透しつつある。伊藤先生は担当する英語の授業で、従来の訳読中心の授業法をがらりと変え、小集団でのデイスカッションやグループワークを多用している。そうした授業の変化により、生徒はより積極的に授業に参加するようになった。

「物理では生徒の授業評価が大きく向上し、特に下位層の学習意欲や学力が目に見えて高まっています。ただ、入試対応力の向上にまで結び付くのは、まだ分かりません。そこ

が課題の1つですので、今後の結果などをしっかり検証したいと思います」(赤坂先生)

現状の取り組みを更に精選し、より実効性のあるキャリア教育を進めることも課題だ。

「チャレンジすることの大切さや社会人に求められる力に対する生徒の意識は高まっていますが、全ての取り組みが生徒の学力向上に結び付いているわけではありません。そのことを教師一人ひとりが自覚し、生徒に必要なことは何かを明確にしていかなければ、本当の改革は実現できません。今まで以上に生徒の進路に対する思いを強め、保護者とも連携を図りながら、より実効性のある進路指導を構築していきたいと思っています」(佐藤先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「大分県立日田三隈高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け



◎砂本貞吉牧師によって聖書と英語の女子塾「広島女学会」として開校。後に女性宣教師 N.B. ゲーンズ氏を校長に迎え「私立英和女学校」となる。1932（昭和7）年に現校名に改称。以来、キリスト教主義教育を土台に国際・人権・平和教育に注力している。

設立	1886(明治19)年
形態	全日制/普通科/女子
生徒数	1学年約220人
2014年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、大阪大、神戸大、広島大、山口大、九州大、県立広島大などに87人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、広島修道大などに延べ486人が合格。
住所	〒730-0014 広島市中区上鞆町11-32
電話	082-228-4131
Web Site	http://www.hjs.ed.jp/

広島県・私立
広島女学院中学高校

難関大指導とスーパーグローバルハイスクール

難関大対策講座と グローバル教育を機に 生徒の意欲を高める

変革のステップ

背景

◎全人教育に定評があったが、「生徒の力を伸ばし切れていない」という声が聞かれるように。生徒の中からも難関大に対する期待が感じられた

実践

◎東京大・京都大志望者への放課後補習を数学・理科で実施。その後、対象の大学と教科を拡大し難関大対策指導を強化

成果

◎東京大・京都大の合格者が出るようになり、志望者も毎年2桁に及ぶ。今後はSGHで掲げたグローバルリーダーの育成を目指す

**京都大現役合格の知らせに
沸き起こる歓声と拍手**

広島女学院中学高校は、広島市の中心部に位置する私立の中高一貫校だ。キリスト教主義教育を土台に、グローバル教育、人権・平和教育に力を注ぐ。英語の女子塾として創立した歴史を背景に、英語教育に定評があり、海外の大学に進学する生徒は過去20年で約50人以上、国連職員や外交官などグローバル規模で活躍する人材を輩出している。そんな県内有数の伝統校である同校が、2008年、難関大合格者増に向けた改革に着手した。渡辺信一教頭はこう話す。

「通常の授業や部活動、人権・平和教育などで生徒を伸ばしていくのが、本校の伝統です。進学は個人の問題で、学校が組織的に働き掛けるという考えは、それまではあまりありませんでした。一方で、外部から『生徒の学力を伸ばし切れていない』と、厳しい指摘をいただくこともあり、私立校に対する社会の期待が高くなっていると感じていました」

渡辺教頭が今でも忘れられない光景がある。2008年3月、当時進路主任だった渡辺教頭は、中学3年生・高校1年生の集会で次年度の取り組みを説明した。その日は京都大の合格発表日。久しぶりに同校から現役合格者が出たため、「良いニュースがあります」と公表すると、生徒たちから歓声上がり、拍手が沸き起こった。

「歓声を聞いた瞬間、生徒は難関大に挑戦したいという意欲を潜在的に持っているのだと直感し、そうした意欲に応える取り組みを絶対にやろうと誓いました」（渡辺教頭）

難関大補習を始めて1年目で 早くも東京大に2人が合格

08年4月、東京大・京都大志望の3年生を対象とする、初めての放課後補習が始まった。教科は数学と理科で、18時～19時20分に実施した。



広島女学院中学校教頭
渡辺 健一 わたなべ・けんいち

教職歴30年。同校に赴任して23年目。「目の前の生徒に学ぶ。生徒は本気になれば必ず変わる」



広島女学院中学校
中村 紀子 なかむら・のりこ

教職歴15年。同校に赴任して9年目。進路指導部主任。「『意欲のあるところに道は開ける』。最後のひと押しをしてくれるのは自分のやる気」



広島女学院中学校
高見知伸 たかみ・ちのぶ

教職歴23年。同校に赴任して19年目。グローバル教育推進部。「研ぎ澄まされた人権感覚を持ち、世界平和に貢献できる生徒を育てたい」



広島女学院中学校
安宅弘展 あたぎ・ひろのぶ

教職歴11年。同校に赴任して12年目。グローバル教育推進部。「こりあえずやってみる、行ってみる、話してみる。そこから何かが変わっていく」

全人教育を重んじてきた同校にとって、放課後に補習を行うのは容易なことではなかった。

「部活動や課外活動の時間が減るため、補習に異議を唱える先生がいたのは確かです。そこで、補習は生徒の希望を受けて学年会が

実施するのであり、進路指導部はそれを最大限応援するという形で提案し、職員会議での了承を得ることが出来ました」（渡辺教頭）

補習によって個別指導を徹底させたことで、09年度入試では東京大志望者4人のうち2人が合格を勝ち取った。この結果が、指導に当たった教師の自信となったのはもちろん、先輩の躍進を目の当たりにした後輩に「自分たちも合格できるかもしれない」という思いを抱かせた。

そして、10年に新校舎が竣工した際には自習室が設置され、生徒の自学を後押しする環境も整った。3年生での難関大志望者のための放課後補習は恒常的な取り組みとなり、今は「難関大学別対策講座」として、国語・数学・理科・地歴・公民で全12講座が開かれている。14年度は延べ66人の生徒が同講座を受講した。3年生担当が「難関大学別対策講座」を受け持つことで、先を見通した指導が出来るようになったと、進路指導部主任の中村紀子先生は振り返る。

「東京大や京都大の入試問題を分析し、合格に必要な力を教師が再認識できたのは大きかったと思います。普段の授業でも、中学校段階から大学入試を意識した内容を入れるよ

うになりました。大阪大の過去問を解いていた高校3年生が「これ、中3の時に習った考え方を応用すれば解けますよね」と言った時は、積み重ねてきた指導が生徒の中にしっかりと根付いているのだとうれしく感じました」

最難関大を目指す生徒が常にいることも、普通になった。生徒が刺激し合い、向上していく仲間が出来たことで、最後まで諦めない意識も強くなっている。過去6年間で東京大に19人の受験者中4人、京都大に39人中12人が合格した背景には、生徒や教師のそうした変容があった。

SGHで世界の平和構築に 貢献するリーダーを育成

難関大指導が定着した同校は14年度、文部科学省が指定する「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」に選ばれた。中四国・九州圏の私立校では唯一の指定校だ。「ヒロシマ」を継承・発信し、世界の平和構築に貢献するリーダーとなる生徒の育成を目指し、リーダーに必要な3つの力、平和観・対話力・リーダーシップを養うカリキュラム「Peace Studies」に取り組み（P.32図）。取り組みの柱となるのは、①平和教育の授業方法を変え、グローバル人材にふさわしい力を付ける、②国際的に通用する英語力をこれまで以上に育成する、③その2つの力を国内外で活用する機会を設けることだ。

SGHに指定された広島女学院が目指す、グローバル人材像＝
「核の惨禍のない世界を創り出すしやかな女性」
 「ヒロシマ」を継承・発信し、世界の平和構築に貢献するリーダーとなる生徒を育成。リーダーに必要な3つの力、**平和観・対話力・リーダーシップを養うカリキュラム“Peace Studies”**を实行。

平和観

平和を共に創るという視点から、**世界を見る力**。国内外の様々な社会問題に目を向け、深い**探究心**と強い**使命感**を持ったグローバル・リーダーを育成する。

対話力

価値観の違う他者と、**コミュニケーションをとる力**。考え方の違う相手を認め、**コミュニケーション**を通じて相手の考えを理解し、自分の考えを発信することが出来るグローバル・リーダーを育成する。

リーダーシップ

他者と合意を形成し、**それを実行する力**。集団の中で**主体的**に議論を導き、考えの違う相手ともお互いに納得できる結論を出し、それを実行に移すことが出来る**行動力**を持ったグローバル・リーダーを育成する。

●各学年の総合学習の時間に、“Peace Studies”を行う。**学年ごとに徐々にテーマを世界へ広げ、学びから実践に高める**ことで、生徒の平和観・対話力・リーダーシップを段階的に成長させていく。Peace Studiesとかかわりの深い**海外派遣プログラム**を行うと共に、**海外から本校に中高生を招聘**するフォーラムを開催する。Peace Studiesの時間は、**生徒の主体的な学び**を中心として展開する。教師による一方的な講義形式でなく、生徒が自分でテキストを読み、説明し合い、議論し合う。「正解」のない内外の課題を論理的に考え、自分なりの意見を持ち、それを他者と伝え合いながら具体的な実践に移せるようにする。

学習を通じて、**生徒の世界観・価値観を広げる出会いを提供**する。従来以上に充実した国内外の研修に加え、新たに海外研修（希望者）を立ち上げる予定である。学習の中に、国内外のゲストスピーカーを多数招聘する。

*学校資料を一部抜粋して編集部が作成。Peace Studiesの具体的な内容は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。<http://berd.benesse.jp> >教育情報>高校向け

参加、海外の方との交流の中で、それまで疑問もなかった『常識』に『なぜ?』を突き付けられ、動揺することがあります。でも、それはある意味、健全なこと。価値観を揺さぶられる経験こそが大切なのです」

生徒が主体的にかかわる授業へのシフトの流れは、教科の授業にも広がっている。安宅先生は、中学2年生の日本史の授業を、現在から過去へとさかのぼって教える形に変えた。現代の世界はどのようなにして出来たのか、10年前、20年前にさかの

生徒主体の「碑めぐり」で平和の大切さを伝える

SGH指定校として同校が育成を目指す全ての力を発揮する場の1つが、30年以上続く「碑

ぼって考え、資料を読んで説明したり、生徒同士で議論したりする時間を設けている。授業の雰囲気も変わり、話をただ聞くだけだった生徒が、生き生きと活動に参加しているという。

「以前から受け身な生徒が多いと感じていましたが、それは生徒が能動的に活動できる場を、私が提供していなかったことが原因だと気付きました。私が話し続け、入試に必要な知識を効率良く教えることに終始していた授業では、『次に何を教えてもらえるのか』という待つ姿勢を生み、生徒を受け身にしてきたのだと思います。考える時間、自由に意見を言える場をつくれれば、生徒は自ら動き出すのだとつくづく実感しました」（安宅先生）

国際的に通用する英語力は、豊富なインプットとアウトプットの機会を設けている授業に加え、選択制のハイレベル講座や苦手分野克服のための放課後勉強会など、習熟度に合わせた丁寧な指導で育成する。その結果、中学3年生と高校1年生の全員が受検しているベネッセのGTEC for STUDENTSでは、高校1年生が平均点500点以上という好成绩を取っている。

平和教育については、被爆都市ヒロシマの高校として長年にわたる実績があり、SGH指定を機に、生徒がより主体的にかかわる授業にした。一斉授業から、生徒たちのディスカッションや発表によって進める形に変えた。地歴・公民科の安宅弘展先生は、その意図をこう話す。

「従来の答えを教える指導からの脱却を意識しました。グローバル社会が直面している課題に正解はありません。平和とは何か、そ

のために何をすべきか、生徒同士が議論し、彼女たちなりに答えを探し出せるように後押しし、主体的に課題解決に向かう力を身に付けさせたいと考えています」

多様な考え方に触れる中で、自分の持つ価値観が揺らぐ生徒もいる。グローバル教育推進部の高見知伸先生は次のように語る。

「核兵器保有に絶対反対という生徒でも、

「次は何を教えてもらえるのか」という待つ姿勢を生み、生徒を受け身にしてきたのだと思います。考える時間、自由に意見を言える場をつくれれば、生徒は自ら動き出すのだとつくづく実感しました」

国際的に通用する英語力は、豊富なインプットとアウトプットの機会を設けている授業に加え、選択制のハイレベル講座や苦手分野克服のための放課後勉強会など、習熟度に合わせた丁寧な指導で育成する。その結果、中学3年生と高校1年生の全員が受検しているベネッセのGTEC for STUDENTSでは、高校1年生が平均点500点以上という好成绩を取っている。

めぐり」だ。同校には、キリスト教同盟校や教育関係者、政府関係者など、毎年国内外から100〜150人が訪問する。案内や交流会などは生徒が中心に進め、必要に応じて平和記念公園の碑を案内する「碑めぐり」を行う。訪問者対応は希望制だが、毎回20〜30人の生徒が応募し、参加数は年間延べ100人以上となる。

「碑に書かれた内容を語るだけでは不十分で、生徒は自分で調べた内容や、被爆者に直接聞いた話を織り交ぜながら、原稿を読まずにお客様を案内します。海外からのお客様には、もちろん英語で対応します。プレゼンテーション能力やコミュニケーション力などを磨くと共に、自ら考え、責任を持ってやり遂げることで、リーダーに必要な資質を養える場にもなっています」(高見先生)

以前は生徒が用意した原稿を教師が全て確認していたが、3年前から、高校2・3年生からリーダーを選抜し、後輩の指導を任せるようにした。リーダーが後輩の原稿をチェックし、リハールを行った上で当日に臨む。

SGHで育んだ力を海外で発揮する場としては、生徒の海外派遣の機会を増やす。現在のアメリカ・オーストラリアへの短期留学に加え、14年度から中学2年生や高校1年生ではカンボジアや韓国への研修旅行を行う。これまでは語学研修が中心だったが、SGHでは平和教育の要素を取り入れ、現地の同世代の学生と平和に

ついで語り合い、核兵器不拡散条約再検討会議といった国際会議では生徒が発表する予定だ。

平和・人権教育における 中高の連動性を高める

今後の課題は大きく分けて2つある。1つは、成績上位層が持つ志望実現に向かつて切磋琢磨する雰囲気、学級全体に広げることだ。

「本校の生徒は志望を表に出したくないという意識が強く、そこを打破することが今後の目標です。自由に夢や志望を語り合える場、安心して語り合える雰囲気をつくることは、最後まで諦めない粘り強さを育む上でも大切

です。自分の言動に責任を持つことにもつながると期待しています」(中村先生)

2つめの課題は、SGHにおける中学校と高校の連動だ。難関大合格者増を目指す改革の過程で高校の教育課程を変更し、7時限目を設けた。学力は底上げされたが、放課後の時間が減り、中学校と連動した課外活動が少なくなった。

「高校の先輩が海外からのお客様と英語で話す場面を見れば、今、学んでいる英語がどう役立つのかが分かり、中学生の学習意欲も高まるでしょう。今後は6年一貫教育の利点を生かして中高の連動性を高め、学力だけでなく主体性や国際性の面でも早期からの育成を図っていききたいと思います」(渡辺教頭)

情熱 若手教師が語る、指導変革への

生徒に動かされて 教師も学校も成長する

グローバル教育推進部 安宅弘展

本校に赴任して11年の間にいくつかの転機がありました。1つは、2008年に難関大の合格者増の方針が打ち出された時です。当時、私は3年生の担任で、他教科や他学年の先生方からの協力をいただいて、放課後補習を実現させることが出来ました。それまで目の前の生徒だけしか見ていなかった私が、初めて、組織の中にいる自分を意識するきっかけになりました。

もう1つは13年度、SGHへの申請や構想内容の立案を行う検討委員会の委員長を任された時です。プロジェクトチームを組織し、先生方からご意見をいただきながら、A4用紙50枚分の申請書を作成・提出した結果、文部科学省から指定を受けることが出来たのは、大きな自信になりました。

いずれも学校の指導の方向性を決める局面で、活躍の場を与えられたのは幸運だったと思います。ただ、最近つくづく感じるのは、学校を前に進ませているのは、教師ではなく生徒だということです。難関大学別対策講座が実現したのも、東京大に行きたいという生徒の声があったからであり、SGHに指定されたのも、海外で頑張っている卒業生や平和のための活動に取り組んできた生徒たちがいたからです。生徒の思いが私たち教師を動かし、学校の文化や制度を変える力になりました。これからも生徒たちが生き生きと活躍できる場を提供し、本校でしか出来ない改革、人づくりを追求していききたいと思います。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2014年8月号指導変革の軌跡「長野県上田高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け

「もっと響く指導」に するために！ 生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を2006年から12年まで伝えてきた「生きたデータの徹底活用」のコーナー。更に響く指導を実現するために、これまで掲載した記事を基に現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

テーマ 3年生2学期後半の意識付け



「生きたデータ」2007年10月号を参考に、
3年生2学期の家庭学習習慣の把握を行ったところ……

● 家庭学習習慣の維持・改善を図る「学習の記録」

A 生活時間帯併記型（1日の生活のリズムをチェックしよう）

月/日 (曜)	行事	生活時間帯												教科別学習時間					合計	
		午前						午後						英	数	国	歴公	理		
/	()	2	4	6	8	10	12	2	4	6	8	10	12	2	時分	時分	時分	時分	時分	時分

B 累計時間掲載型（自宅学習時間はどれくらい？）

今月の目標		目標勉強時間		実際の勉強時間	
		英語()	数学()	国語()	()
		歴公()	理科()	※1日平均	
		※1日平均			

月/日 (曜)	行事	学習時間									一言振り返り・反省
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	
/	()										

私の狙い

生徒に自らの学習状況を把握させることで、不安を解消させつつ、学習上の改善点を指摘したかった

取り組み内容

毎週1回、記録を提出させ、各担任がチェックするようにした

感じた課題

回収した学習の記録で何をチェックし、活用するか、学年団で意思統一が図られていなかった。また、「学習時間が少ないと叱られる」と水増しして提出する生徒もいた



この時期の3年生は、学習の取り組み方や学習量に対して漠然とした不安感を抱いていることがあります。そうした不安を解消し、今の自分の取り組みに自信を持たせるため、以前3年生の担任を務めた時に、生活リズムや教科バランス、学習量をチェックする「学習の記録」を活用しました。しかし、生徒たちにとっては「記録することが目的化してしまったように思います。



私も経験があります。学習時間の総量を強調しすぎると「学習時間が少ないと叱られる」と考える生徒が出てきます。この時期、学習記録を活用する際は「学習の具体的な成果や改善点を知り、自分を客観的に分析する」ことが目的だと、生徒に明確に伝えることが大切だと思います。



学習記録を付けることは、担任が生徒をチェックするだけでなく、自分で自分をチェックするためだということが生徒に伝わっていませんでした。



学習記録を付けたから学習時間が増えるというものでもないと思いますし、この時期の担任は、学習時間の増減以上に、学習の質も見ることが大切だと思います。例えば、苦手な数学の学習時間が減ったのは、数学から逃げたために時間が減ったのか、分からない問題に時間を掛け過ぎないように、一定の時間考えたら解説を見るようにするなど、勉強の仕方が変わったからなのかどうかで、その後の声掛けが違ってきます。

*このコーナーは、高校の先生方（今回は関東、中国、九州地方）との検討会の内容を基に構成しています。

「もっと響く指導」
のポイント

1

学習状況を客観視し、
成果と課題を自ら語る力を養う

若手先生代表

九州地方の公立高校
に勤務。14年度は2
回目の3学年担任。



A先生(30代)

中堅先生代表

九州地方の公立高校
に勤務。14年度は3
学年主任を務める。



B先生(40代)



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」活用改訂案



●家庭学習の成果と課題を客観視する「学習の記録」

自分の状況を客観的に分析しよう								組	番	名前		
月/日 (曜)	次の模試 まであと	教科別学習時間(前回模試SS)					合計	生活リズム				一言振り返り・反省
		英() 時 分	数() 時 分	国() 時 分	歴公() 時 分	理() 時 分		起床	帰宅	宅習 開始	就寝	
/	日	予定						:	:	:	:	
()		実績						:	:	:	:	
/	日	予定						:	:	:	:	
()		実績						:	:	:	:	
/	日	予定						:	:	:	:	
()		実績						:	:	:	:	
/	日	予定						:	:	:	:	
()		実績						:	:	:	:	

〈1週間の成果と反省〉

成果

反省

「もっと響く指導」のために
改訂すると……



私は生徒に「成績不振の原因は、しばしば生活習慣にあるものだ」とよく話しています。時間の使い方に無駄や無理があったり、生活のリズムに乱れがあったりすれば、成績は伸び悩むからです。そうした受験直前期ならではの生活習慣の改善点を見つけるための学習記録だと説明します。



以前活用した際、毎日生徒から回収し、チェックするようにしたのですが、担任としては正直負担感も大きかったです。



毎日のチェックは必須ではなく、1週間など時間を区切って確認すればよいでしょう。むしろ大切なのは学習記録を材料に、生徒が自分の状況を分析し、今後何をすべきかを自ら語る面談の場を設けることです。上のように、生活リズムと学習量の関係を確認できる記録表を利用してみてはどうでしょうか。



担任が「学習時間をチェックする」という気持ちで面談に臨むと、どうしても「この教科・科目の学習量が足りない」などと、生徒を一方的に注意しがちです。



学習時間の不足は生徒もよく分かっています。あとは、何をどうすれば改善できるかを自分で語らせることで、行動を変えることが出来ます。「君はどう思う?」と聞き役に徹し、生徒に多くを語らせたいものです。

プラスαの検討ポイント

From 編集部

記録表からの
生徒把握の
観点は
共有されているか?

今回の記事の検討会には、関東・中国・九州地方から、地域を代表する進学校の先生が参加されました。先生方は、「担任が管理する学習から、生徒が自律する学習への後押し」としての役割を学習記録に見いだされていました。一方で、「学年団の中で、学習記録の読み取り方がぶれている場合もある」という現実も指摘されました。「経験の浅い若手がいる場合は、『帰宅時間から学習開始までの時間に変動はないか』などチェックの観点を改めて共有するミーティングも必要」という提案もありました。



「生きたデータ」2007年10月号を参考に、
センター試験2か月前の志望を確認させたところ……



● 学びの内容を重視し、全国の大学に目を向けさせる面談資料
【生徒自身による記入と、教師からのアドバイスで作成】

現段階の志望校	注目している 研究内容や教育制度 (生徒による記入)	そのほかの特徴			入試基礎データ(ベネッセ「PERFECT BOOK」などより)				
		COE	GP	伝統など	目標得点		募集人員		昨年度 実質倍率
					センター試験	2次試験	前期/後期	前期/後期	前期/後期
A大 工学部	ロケット工学の分野で実績あり	○	○	旧帝大	650	156	200/150	5.2/5.8	
B大 工学部	卒業生の就職実績良好		○		615	260	300/100	4.2/6.2	
C大 理工学部	日本最大の実験施設所有				600	320	100/50	3.8/6.1	

このほかの志望校候補	注目すべき 研究内容や教育制度 (教師からのアドバイス)	そのほかの特徴			入試基礎データ(ベネッセ「PERFECT BOOK」などより)				
		COE	GP	伝統など	目標得点		募集人員		昨年度 実質倍率
					センター試験	2次試験	前期/後期	前期/後期	前期/後期
Q大 工学部	航空機エンジン研究で実績あり		○		600	420	300/150	3.7/3.9	
R大 理工学部	コンピュータ教育が充実			開校2年	600	260	200/100	2.8/3.8	
S大 工学部	留学制度が充実。進学率が高い		○		580	350	100/150	1.9/4.1	

私の狙い

模試の合格可能性判定
だけにとられず、学
びたいことを軸に、幅
広く受験校を考えさせ
たかった

取り組み内容

11月に生徒に配布し、自
宅で記入させた。担任か
らは受験情報誌や大学案
内など参照すべき資料を
紹介した

感じた課題

回収したシートからだけでは、生
徒の志望の「こだわり」「軸」が
見えなかった。シートをもとに
した面談の実施状況も各担任でば
らつきがあった



以前、3年生の担任を務めた時には、上記のようなシートを使って志望校と注目している研究内容、入試データなどを生徒に書かせました。今年度、再び3年生の担任となったので、シートの改訂も行いたいのですが、COEやGPといった項目の変更をはじめ、どんな観点で改訂を行えばよいか悩んでいます。学年団には「入試データだけ書けばよいのでは」という声もあるのですが……。



確かに2学期後半からは教師も生徒も入試データにますます目が向くものです。しかし、「何を学びたいか」「志望校に感じる魅力」を入試直前まで確認していくことが、納得感のある受験校選択と、粘り強い学習につながると思います。



近年は、大学中退者の増加も問題になっていますよね。第1志望以外の第2、第3志望の大学に出願する場合を想定して、志望校への納得感をこの時期も継続して高めておくことが大切だと私も思います。



受験校選択のためだけでなく、生徒を「大学で学べることを考えたら、勉強のやる気が高まった」「粘り強く学習に取り組めるようになった」という状態にしてあげたいですね。最近、受験のストレスの軽減のための指導を行う高校もあると聞きます。「この時期からは勉強のことだけを考えればよい」という考えからの転換が必要でしょう。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます！

生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所

http://berd.benesse.jp

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご利用ください！

HOME→教育情報→高校向け→

生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

2006年度10月号 3年生2学期の意識付け
2007年度10月号 粘り強さを育む3年生2学期の意識付け
2012年度8月号 「根拠」を明確にすることで、3年生2学期からの志望を貫く

「もっと響く指導」
のポイント

②

志望の「こだわり」「軸」を再確認すること、
納得感のある受験校選択へとつなげる



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」作成改訂案



● 志望の軸を明確にする面談資料

現段階の志望校	注目している 研究内容や教育制度 (生徒による記入)	卒業後の希望進路、 取得したい資格 (生徒による記入)	その大学に感じる 魅力 (生徒による記入)	入試基礎データ(ベネッセ「PERFECT BOOK」などより)				
				目標得点		募集人員 前期/後期	昨年度 実質倍率 前期/後期	最新の 模試 判定
				センター試験	2次試験			
A大 工学部	ロケット工学の分野で 実績あり			650	156	200/150	5.2/5.8	D
B大 工学部	卒業生の就職実績良好			615	260	300/100	4.2/6.2	C
C大 理工学部	日本最大の 実験施設所有			600	320	100/50	3.8/6.1	B

保護者サイン []
※何かあればご自由にお書きください

「もっと響く指導」のために
改訂すること……



とはいえ、学びたい内容、就職や資格といった項目については、「入学段階からいろいろな取り組みを通して十分に考えてきたのだから、同じことをこの時期になって改めて聞く必要はない」という考えもあると思います……。



大切なことだから何度も尋ねるべきですし、生徒が自分の言葉で説明することで、それが志望の軸となって根付くのだと思います。また、入試本番が迫る中、これまで以上に本気で進路を考え、志望の軸が明確になっているはず。模試判定などの現実も踏まえながらの志望だからこそ、本物だと言えるのではないのでしょうか。そうした生徒の志望の軸を把握することで、出願直前の三者面談で、生徒が「私の志望のこだわりはこれです」と自信を持って保護者に語り、担任も後押しする関係をつくるのが大切です。



では、こうしたシートはいつ、どのように書かせればよいのでしょうか。学校ではなかなか時間が取りにくいので、シートを自宅で書かせてくる方がよいのでしょうか？



私は、自宅では勉強に集中させたいので、LHRなどの時間で出来るだけ書かせるようにした方がよいと考えています。もちろん、時間が足りない時は家で書いても構いませんが、教室で、皆で取り組むことで、「志望を振り返る」ことが大切なのだと実感できるはず。記入した後に「よし、頑張ろう！」とクラス全員が笑顔になれたらいいですね。

プラスαの検討ポイント
From 編集部

生徒を
自分自身の
言葉によって
本気にさせる

今回の誌面の検討会では、「生徒自身に学習の改善点や、志望のこだわりを語らせることで、それが生徒の内面に根付いて、行動につながる」と先生方はおっしゃっていました。ある先生は「本校では北海道から九州まで、生徒は全国に進学しているが、それは教師以上に生徒が様々な大学の魅力を自分の言葉で語れるようになった結果だ」と説明されました。学習時間の確保が最優先なのは当然ですが、その中で生徒が志望校への思いを語る場面もつくっていくことが大切なのでしょう。

「知の統合」の流れが 学問のあり方を変える

産業技術大学院大 特任教授・名誉教授

福田哲夫

細分化されがちな学問分野を統合し、社会とのつながりを取り戻す動きが活発になっている。「知の統合」と呼ばれるこの考え方は、グローバル化や複雑化が進む社会において、社会問題へのアプローチや企業活動によるイノベーションを生み出す上で、不可欠になりつつある。「知の統合」は、学問のあり方をどう変えるのか。多領域のコラボレーションによって新幹線N700系などを生み出してきたインダストリアル・デザイナーの福田哲夫教授に聞いた。

なぜ1つの正解を 求めようとするのか

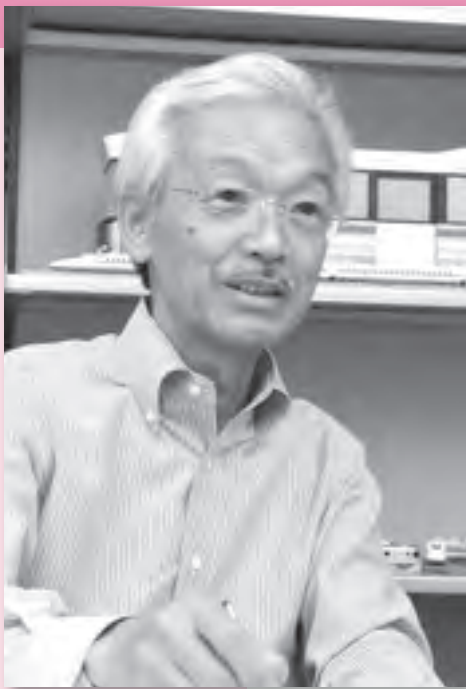
デザインは、正解が1つではない世界で、自分なりの答えを創り出していく営みです。しかし、デザイナーを志す学生でも、決められた正解を見つけようとする思考にとらわれている者が少なくありません。自由な発想が出来るデザイナーに育てるためには、そのような考えから

脱却させること、それが最初の一步となります。もともと、デザインに限らず、世の中の森羅万象には、絶対的な答えなどないはず。例えば、世界に共通する幸せな家族の形などはないでしょうし、誰が見ても完全無欠の製品も存在しません。それなのになぜ、私たちは1つの正解を求めようとするのでしょうか。子どもが描く絵を見てみると、自由な発想に感心することがよくあります。パプロ・ピカソ

今、「知の統合」が 注目される背景とは

◎学問は本来、社会に役立てられるべきものだ。しかし、現代では、学問の細分化が進み、人間や社会とのつながりが見えにくくなっている分野が少なくない。「知の統合」は、学問分野をつなぎ、学問に「社会性」を取り戻す考え方といえる。日本学術会議の提言によると、「知の統合」は、「異なる研究分野の間に共通する概念、手法、構造を抽出することによってそれぞれの分野の間での知の互換性を確立し、それを通してより普遍的な知の体系を作り上げること」と定義されている（『知の統合―社会のための科学に向けて―』2007年）。

「知の統合」が重要視される背景には、社会のグローバル化や複雑化により、特定の専門分野ではアプローチが難しい事例が増えていることもあるようだ。例えば、環境問題は、環境政策に加え、経済学、社会学、生物学、化学、倫理学など多くの専門領域からのアプローチが試みられている。また、企業活動においても、異なる業界の企業のコラボレーションによって、新たな商品・サービスを展開する例が少なくないが、こうしたケースも広い意味での「知の統合」といえる。



の絵を見て、「型にはまっている」などと言う人はいないと思いますが、時として子どもの絵の中に、ピカソに通じるような自由さが見られます。しかし、それを見た大人がよかれと思いい、「遠くにあるものが大きく描かれているのは変だよ」「色が違うよ。よく見てごらん」などとアドバイスするうちに、子どもは段々と自由な発想を失い、大人が示す「正解」を求めるようになってしまうのではないだろうか。

大人のアドバイスは、時として、子どもが自分で考えることを放棄させかねません。それを忘れてはいけないと思います。遠近法を使っていなくても、写実的でなくても、子どもは自分が受けた印象を素直に表現しようとしているのかもしれない。それは、意味のある表現だと思えますし、そこから新しい発想につながるこ

とも多々あるものです。

これからの時代は、指示に従うだけではなく、自ら主体的に学び考える力や、多様性の共有が重要だといわれています。しかし、現状ではまだ、子どもの発想よりも学習の効率性が優先されているような気がしてなりません。高校教育において、大学受験に向けて効率的に知識を蓄積させることを、ある面で生徒自身も望んでいるでしょう。しかし、個々の発想を尊重して引き出した好奇心は、生徒が生涯にわたって学び、かつ伸び続ける力になるはずですよ。

集団で高め合えるのは 学校教育の最大の利点

デザインの教育においても、好奇心を引き出すことはとても重要です。例えば、マテリアル（材料）の選択によって、風合いや触感など、製品の仕上がりは大きく変わりますから、デザイナーにマテリアルの知識は不可欠です。しかし、学生を見ていると、「他にはどんなマテリアルがあるか」と好奇心旺盛に探求する者もい

れば、なかなか自分から学ぼうとしない者もいます。どちらが優れたデザイナーになる可能性が高いかは、言うまでもありません。

好奇心を育むために、1枚の紙で多様な表現をさせる活動を行うことがあります。学生は、折ったり、切ったり、裂いたり、濡らしたり、火であぶったりと、紙を様々な方法で表現します。隣の学生の表現方法からヒントを得たり、「もっと面白いものを作ってみよう」と刺激を受けたりすることで好奇心や創造性が高まっていきます。このように集団で高め合っている活動を行えることは、学校教育の何よりの利点です。

好奇心は、知れば知るほど高まるという性質があると感じます。ある教科を苦手としている生徒がいたら、まず分かっていたり知っていたりとの面白さに気付かせ、徐々に好奇心を引き出していくことが大切だと思います。

直感と観察を重んじる デザインの思考プロセス

デザインは、「センス」が最も重要だと考える人がいますが、もちろん、それだけではありません。ものづくりに限らず、日常のあらゆる場面で、正解のないものを突き詰めて考える際に参考になると思いますので、我々デザイナーが、どのような思考過程を経て「答え」を創り出していくのかを紹介します。

ふくだ・てつお ◎日産自動車で車の部品からフルサイズの全車設計までを手掛ける。1970年代にフリーのインダストリアル・デザイナーとして独立。輸送機器を中心に、電気機器、精密機器など多分野のプロジェクトに携わる。80年代後半から鉄道車両のプロジェクトにかかわり、新幹線N700系他、多くの鉄道車両のデザインを担当。

「新しい鉛筆をデザインする」という課題が与えられたとします。最初に出てくるのは、「こうすれば書きやすくなるだろう」「こんな見た目の鉛筆があったら面白い」という反応的・感覚的な発想です。これは、それまでの人生を通じた膨大な量の経験に基づいており、無意識的に生み出される場合もあります。この段階で豊かな発想を出せるかどうかは、実体験での感動など、いかに多様な経験を積み重ねてきたかが大きく関係します。私が常々、好奇心の重要性を説く理由の1つが、ここにあります。

直感的な反応の後は、自分の発想を科学的に観察・分析する視点がふつふつと湧いてきます。「他の人も欲しいと思うか」「本当に実現が可能か」など、いわば第三者の視点から直感を見直し、課題を発見します。このような「科学」する心を育てるためには、自己をじっくり見つめる経験を重ねる必要があります。

こうした課題発見の過程を経て、発散的思考段階に入ります。直感と観察を踏まえ、アイデアを膨らませて多くの案を生み出していきます。マインドマップをはじめ、いわゆるブレインストーミングを、自分の中で行っている状態といえます。最初に直感的に生まれた発想よりも、現実的な案が出てくるようになるのです。

最後に収束的思考段階に移ります。ここでは、「ビジネスマンのための鉛筆」などとコンセプトを明確にした上で縦横に広がった様々なアイ

デアをあらゆる条件や制約でふるいにかけていきます。こうして最終候補となる案を絞り込みます。

多くの分野の学習経験が デザイナーの土台を形成する

分野により作法は違いますが、以上のような過程を通じてデザインは進められています。正解のないものを生み出そうとする時に、多くの人が頭の中で自動的に行っていることでしょう。だからこそ、各過程につながる経験を積み、力を育てることが、発想を豊かにするのです。

例えば、直観を豊かにするためには、様々な経験の積み重ねが大切です。高校生なら、勉強以外にも、部活動や学校行事、ボランティア活動などを経験することも大事でしょう。また、一見、自分が将来進む道とはかわりがないと思える教科でも、しっかりと学んでおけば後で生きてくるといことが往々にしてあります。

以前、デザイン科を設ける高校を訪問した際、数学の先生から、生徒はデザインの実習にだけ熱心で、数学の授業を真剣に受けないと相談されたことがあります。

その学校で生徒に講演をする機会をいただいた時に、デザインには数学の知識が不可欠であることを理解してもらうために、次のような話をしました。パルテノン神殿やピラミッド、法隆寺の伽藍がらんなど歴史的建造物の視覚的な美しさは、「黄金比」(*1)によって説明できること、

また、生き物が成長する様子などは「フィボナッチ数列」(*2)によって表現することも出来る、という内容です。このような話を聞いた生徒は数学への関心を高めたようで、数学の先生から感謝されました。英語が分からなければ海外の最新情報が入手しづらくなるなど、あらゆる教科がデザインの仕事に関係します。「実はこの教科も自分に関係がある」と気付けば、好奇心がどんどん広がり、自分の中の地図が広がっていきます。各教科で「点」だったことが「線」になり、やがて「面」になって、デザイナーとしての土台が形成されていきます。

これは、どんな職業にもいえることです。また、専門外にも目を向けることは、仕事だけでなく、人間としての幅も広げてくれるでしょう。

新幹線N700系は 「知の統合」から生まれた

多分野を学んで個人の資質を広げることが、「知の統合」がますます求められる今後の社会を生きていく上で不可欠といえます。

新しいものは、既知のものを再構築したり、組み合わせたりすることでしか生まれえないというのが、私の基本的な考え方です。近頃、異なる業界のコラボレーションによって生み出されたイノベーションを見受けられますが、これは「知の統合」が進行している表れだと思えます。

この「知の統合」が求められる背景には、社

*1 線分を2つに分割する時に $a : b = b : (a + b)$ が成り立つ比 $a : b$ のこと
*2 最初の2項が1で、3項目以降は直前の2項の和となる数列

会のグローバル化や複雑化があるでしょう。列車を例にとると、蒸気機関車の時代であれば、より多くのものを速く運ぶといった比較的単純な要素を考えるだけで済みました。しかし、私がデザインを担当した新幹線N700系などは、分野を超えた多領域のコラボレーションによる産物です。大まかにいうと、「高速性」「安全性」「居住性」「運用性」「軽量化」「環境性」「乗り心地」「安定性」「静粛性」「製造コスト」「メンテナンス」といった様々な条件を考慮する必要があるりました。列車に、それだけのこと求められる時代になったのです。

それらを、私人の専門性だけで達成するのは不可能です。新幹線のプロジェクトで、私はデザイナーとして設計を担当しましたが、分野の専門家をつなぐコーディネーターとしての役割の方が大きかったと思います。そのため、普段から専門外の分野にも目を向けていなければ、プロジェクトの進行は難しかったでしょう。

また、「知の統合」では、プレゼンテーション力も重要です。自分の頭の中にあるイメージを表現し、異なる軸を持つ相手の頭の中に同じイメージを結実させなくては、納得させることは出来ません。一朝一夕には身に付きませんが、高校時代から重点を置いてほしい分野です。

新幹線N700系のデザインで最も注目されたのは、先頭車両の形状でした。見た目はもちろん、空気抵抗を抑えて高速性能を向上させる

と共に、運転士が安全・快適に運転できるように運転機器の配置や形状を検討するなど、様々な要素を踏まえてデザインされています。シートも、高く評価された箇所の一つです。従来は、シートの背面を倒すと、背中がずれてシャツがまくれ上がってしまうという問題がありました。そこで、出来るだけ生じないような構造と共に、形状や素材を使い、車内で快適に過ごせるようにしました。ここには、新機種の他、人間工学や素材に関する分野の知見が盛り込まれているのです。

軸を持つことで「知の統合」が可能になる

「知の統合」を可能にするためには、自分の専門領域をしっかり深め、軸を持つ必要があります。また、グローバル化時代だからこそ、「日本人であること」も重要な軸となります。日本人としてのアイデンティティをしっかり持つことは、外国の文化から学べることは多くなります。

日本で生まれ育った人には、その地に根差した「センサー」が備わっています。それを常に作動させておくことで、異なる文化への理解が深まり、アイデンティティの更なる強化がもたらされます。例えば、欧米の列車の空調は、どこから風が吹いているか分からないようになっていて、それが快適とされています。しかし、夏に高温多湿となる日本では、適度の風を

直接当てて体の表面に浮いた汗を飛ばします。この違いを知ると、文化の相違に考えが及び、普段は何気なく使われている空調の意味が意識されます。そこから、新しい発想が生まれることもあるでしょう。

**夢を持つことが
全ての教育の出発点**

学校現場には、子どもが夢を持てる環境をつくり上げることをお願いしたいと思います。「自分はこのなりたい」という夢を持てば、そこから逆算する形で長・中・短期の計画を立て、「何をしなければいけないか」を考えて具体的に行動できます。また、「夢が見つからない」という子どももいるかもしれませんが、それは自分の心に対し、深く哲学をしていないからでしょう。しかし、子どもは、自分と向き合う方法を初めから知っているわけではありません。だからこそ、大人が促すことが大事になります。

私は、20代でフリーのインダストリアル・デザイナーになりました。安定した職場から飛び出す不安は大きくありましたが、今まで多くの仕事が出来たのは、「様々な分野で、環境を意識したデザインをしたい」という夢を持ち続けられたからに他なりません。

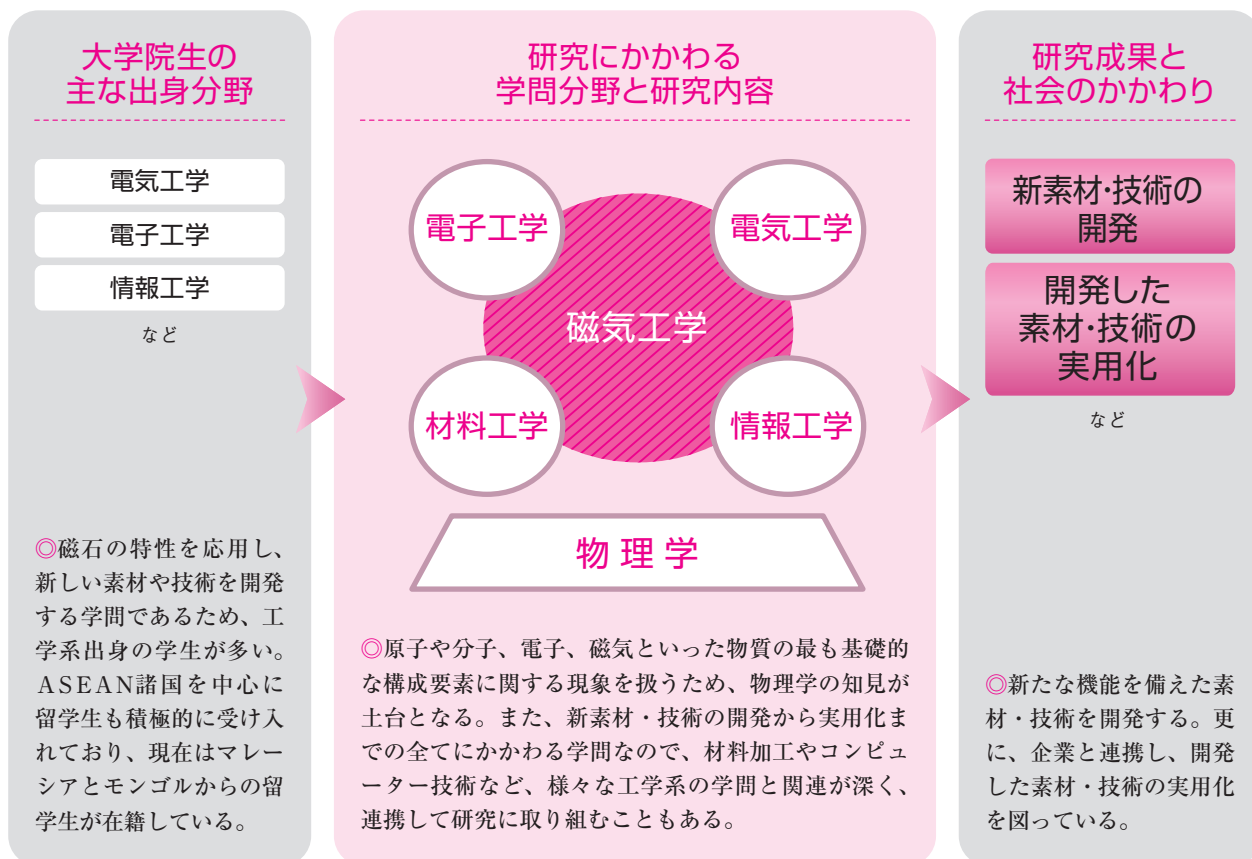
そして、子どもが高らかに夢を語れる環境をつくるために、先生自身も夢を追い続ける教師であってほしいと思います。

磁石を応用した新素材・技術を開発し 生活の快適性・利便性を向上させる

豊橋技術科学大大学院 工学研究科 井上^{みつてる}光輝研究室

近年、排気ガスを出さないクリーンな乗り物として、電気自動車が注目を集めている。その機動性に大きな影響を及ぼすのが、モーターに組み込まれている磁石だ。磁石はこれまでも、発電や通信など様々な製品に用いられ、人々の生活を豊かにしてきた。磁石の特性を応用し、新素材・技術を開発する、磁気工学の第一人者である豊橋技術科学大大学院工学研究科の井上光輝教授に、磁石によるものづくりの魅力を聞いた。

フローチャートで分かる井上光輝研究室



自然現象の仕組みを追究し、分析する力が求められる

磁気工学が求める学生像

自然現象に対する好奇心

実験を続ける気力と体力

新たなものを作りたいという意欲

磁気工学で研究するのは、物質に磁気が発生して磁力を持つなど、ごく微細な現象です。それは、もちろん目には見えませんが、原子や分子などと密接に関連し、物理法則の根本をなします。そのため、磁気工学を学ぼうとする人には、自然現象の仕組みを追究し、解明したいという好奇心と意欲が求められます。太陽が東から昇って西に沈む、あるいは物体が上から下に落ちるといった、ありふれた現象にも、物理法則は働いています。ただ当たり前だと感じるのではなく、「なぜか」を考えることが大切です。

研究では、実験を重視します。1日中装置の前に座り、同じ作業を繰り返すことも珍しくありません。更に、期待通りの結果が得られないこともしばしばです。しかし、実験で科学的に論証しなければ、どれほど優れた仮説を立てても実用化されません。根気よく実験を続ける気力と体力が不可欠です。「これまで誰も思いもよらなかった、新素材・技術を開発したい」という意欲も、実験を続けるモチベーションになるはず。また、実験はグループで行うことが多いので、コミュニケーション能力も欠かせません。

高校生・高専生へのメッセージ 大学や社会では、正解がいくつもある問題や正解がない問題に取り組むことになります。1つの模範解答に達するための学習だけでは、太刀打ち出来ません。物事を多面的に見て分析する練習を、大学入学前に始めましょう。そのためには、ジャンルにとらわれずに本を読み、視野を広げることが大切です。



井上光輝 教授

いのうえ・みつてる 豊橋技術科学大学理事・副学長。同大学院工学研究科教授。豊橋技術科学大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「超大規模脳情報を高度に技術するブレイン情報アーキテクチャーの育成」コーディネーター。工学博士（豊橋技術科学大）。豊橋技術科学大電気・電子工学系助教授などを経て、現職。訳書に『フォトリソニック結晶光の流れを型にはめ込む』（共訳、コロナ社）など。

研究を志したきっかけ 電磁波を 自在に操りたいと 磁気工学を研究

磁気工学とは、磁石を用いた新しい素材や技術を開発する学問、いわば、磁石によるものづくりをするための学問です。

私は、中学時代にもものづくりの面白さに目覚めました。きっかけは、アマチュア無線です。線をつながずに遠方の人と会話できることが、不思議でした。この仕組みを解明したいと、本を読んだのはもちろん、おもちゃのトランシーバーを分解したり、キットを買ってゲルマニウムラジオやワイヤレスマイクを組み立てたりと、手も動かしました。やがて、高性能の無線機を作りたいと思うようになり、高等専門学校（以下、高専）に進みました。高専では、私が在学した1970年代当時はまだ珍しかったコンピュータに初めて触れ、情報工学に興味を持つようになりました。そして、これをもっと深く研究したいと思っていた5年生の時に、高専卒業生を中心に受け入れる本学が開学することを知り、入学を決めたのです。た

だ、入学して間もなく、考えが変わりました。基礎科目として履修した電磁気学や量子力学の授業で、電波や光といった電磁波の性質を学び、それを用いた技術開発に関心が移っていったのです。

電磁波の性質を技術開発に応用するためには、磁気工学の知見が欠かせません。例えば、発電機や変圧器などに用いられる電磁鋼板は磁気を持つ材料（磁性材料）の加工品であり、磁気工学の研究によって開発・実用化されました。そこで、電磁波を自在に操れるように、私は磁気工学の研究を志したのです。

研究概要 加工技術を開発し 磁石の応用範囲を 更に広げる

近年、磁気工学の研究は活発になっていきます。その要因の1つは、電気自動車の開発が進んだことです。電気自動車のモーターには、磁石の

加工品が組み込まれており、その性能はモーターの出力量を大きく左右します。電気自動車が、内燃エンジンによる自動車に代わる新たな自動車として注目され始めたことで、も

つと質の高い磁石で作った素材が求められるようになったのです。

高性能な磁石を作るためには、従来、ディスプレイウムやネオジウムといった金属を用いてきました。ただ、それらは原産国が輸出を制限していることなどにより、非常に高価です。使用すると費用が掛かり、実用化が難しくなります。

私たちは検討を重ねた結果、イットリウム鉄ガーネットという磁石に注目しました。これは、汎用性が高く、今までも通信や記憶媒体など様々な技術に取り入れられてきました。透明な磁石なので光は通すのですが、光を吸収し、その明るさを弱める性質もあります。通過の前後で明るさを保つためには材料を加工する必要がありますが、従来の技術では、加工すると磁石の厚みが増し、その分だけ光が吸収されてしまいました。つまり、明るいまま光を通過させる技術がなかったのです。

そこで、私たちはイットリウム鉄ガーネットの新たな加工技術を開発しました。内部に凹凸を付けたり、表面に金属を周期的に並べたりすることによって、薄いまま磁石に手を

加え、通過させても明るい光を得られるようにしたのです。私たちは、この加工構造を「人工磁気格子」と名付け、普及を図っています。

「人工磁気格子」の開発までは失敗の連続でした。加工したイットリウム鉄ガーネットを1ナノメートル^②、1マイクロメートル^③の薄い膜にし、そこに光を通すという実験を、求める強さの光が出来るまで、加工の仕方を変えて繰り返しました。苦勞しただけあって、うまくいった時の喜びはひとしおでした。実験では、光以外の電磁波や音波などへも応用できることを突き止めていますから、イットリウム鉄ガーネットの応用範囲を更に広げることにもつながると期待しています。

研究の成果と展望

誰も予想しなかった 新素材・技術の開発が ものづくりの醍醐味

ものづくりの成果は、社会に役立てられてこそ得られると、私は考えています。そのため、開発した新しい素材や技術は積極的に実用化を図っています。最近開発したのが、「人工磁気格子」を施したイットリウム

鉄ガーネットによる光マイクロチップです。それを用いれば、従来の1000倍以上速く情報を処理でき、コンピュータによる高度な計算を効率良く行えるようになります。

企業と連携した開発にも、力を入れています。磁石を用いた記憶媒体は、その1つです。完成すれば、2時間の映画なら約2000本と、半導体などによる記憶媒体よりもはるかに大きな容量を収録できるようになります。また、最近では、磁石による3次元映像のディスプレイを世界で初めて開発しました。現在は静止画の段階ですが、更に研究を重ねて動画を表示できるようにしたいと考えています。

私は、誰も行っていない研究に取り組んできました。先行事例がないため、うまくいくかどうかは分かりませんが、それだけに、新たな分野を自分で切り開いているという実感は常に得られました。今後も開拓精神を持ちながら、研究を続けていきたいと考えています。先人が考え付かなかったことを実現できる。そのことに、ものづくりの最大の醍醐味を感じています。

用語解説

① 内燃エンジン

燃料を燃焼させてエネルギーを得るエンジン。

② 1ナノメートル

10億分の1メートル。

③ 1マイクロメートル

100万分の1メートル。

④ 磁場

磁力の働いている空間。磁石や電流の周りに生じる。

スピン波を自在に操り より良い製品を作りたい



金澤直輝 さん

かなざわ・なおき 豊橋技術科学大大学院工学研究科電気・電子情報工学専攻博士後期課程1年。神戸市立工業高等専門学校卒業。

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 大学に入った当初は、コンピュータに興味がありました。中学生の頃からプログラミングに熱中し、高専時代には自動車に搭載する映像認識装置の研究をしてきたからです。しかし、大学で井上教授による量子力学の授業を受けたことがきっかけで、もっと物質の根幹にかかわる研究に取り組みたいと考えようになりました。

量子力学の授業では、原子や分子

など、物質を構成する基礎について学びました。私が最も関心を抱いたのは、電子の自転運動であるスピンです。それは、原子に磁場を発生させる源であり、古くからその存在は知られていたものの、ナノテクノロジーが発達する近年まで、あまり研究されていませんでした。ここに未知の可能性が秘められていると感じた私は、スピンの研究を行う井上教授の研究室の門をたたいたのです。

Q 井上教授の研究室での研究内容を教えてください

A スピンによって出来た波「スピン波」を情報処理に応用する技術について、グループで研究しています。研究を進めるには、スピン波を自在に操作できるようにする必要がありますので、スピン波の流し方や制御の仕方を変えながら、シミュレーション通りに流せるまで実験を続けます。スピン波の制御には、「人工磁気格子」を用います。

1回の実験で予測通りの結果を得られることは、正直、ほとんどありません。しかし、だからこそ面白いと、私は考えています。うまくいかない要因を検討し、新たに工夫を凝

らす。そのどの過程にも発見や気付きがあり、知見が増えるからです。

私たちの研究によって、スピン波を「人工磁気格子」内に閉じ込められるようになりました。スピン波を自由に操作する第一歩です。スピン波による情報処理が実現すれば、電気よりもエネルギー効率が高く、快適に使える製品、例えば、今よりも長時間使用でき、いくら使っても発熱しない携帯電話も作れるでしょう。ものづくりで人々の生活を豊かにする、その夢に向かって、今後も努力を続けたいと考えています。

Q 高校生・高専生へのメッセージをお願いします

A 私は、ものづくりをするために、大学に進学しました。

今の研究は、入学当初に行いたいと考えていた研究とは違いますが、取り組む目的は同じです。大学の授業は、高校よりも内容がずっと難しくなりますし、主体性も求められます。何のために学ぶかがあいまいだと、ただ授業を受けるだけになり、内容がなかなか身に付きません。

皆さんにも、大学で何がしたいのか、しっかり考えてほしいと思います。「やりたいことが分からない」という人には、今まで経験していないことに挑戦することを勧めます。課外活動や習い事など、何でも構いません。心を動かされることが、きっと見付かるでしょう。それが、大学で学びたいことを見付けるヒントになると思います。

私の高専時代

論証も作図も工夫した 実験実習のレポート作り

●高専3年生になると、週1回のペースで実験実習が行われるようになり、事後には必ずレポートが課されました。私は、誰にも負けないレポートを書くという意気込みでした。実験内容をよく理解できると思ったからです。実験の過程・結果を詳しく考察するために専門書を参照したり、グラフや図をきれいに、そして正確に作れるように、作成ソフトにもこだわったりしました。

先生から返却されたレポートには、修正指示だけでなく、「分かりやすくまとめたあるな」といった励ましのコメントが毎回書かれていました。努力が認められた気がして、私は更に整理されたレポートを作ろうと、論証や図・グラフの作成に工夫を凝らしました。

高専時代に分かりやすく、詳細なレポートを書く練習をしたことは、大学入学後、もっと高度な内容についての緻密なレポートや論文を書く上で、とても役立っています。

4 技能を問う外部英語検定試験を導入

グローバル人材の育成に向けて
筑波大が推進する入試改革の内容に迫る

筑波大では現在、「全学版アドミッション・ポリシー」を設定し、求める学生像を明確にした上で、全学的な入試改革に着手している。「グローバル人材の育成」という教育目標の達成に向けて、入試段階から様々な価値観や社会的背景を持つ学生を獲得することが狙いだ。

東京大が2016年度から推薦入試の実施を決定、京大も同じく16年度から特色入試を導入することを発表するなど、現在、国立大で入試改革の動きが進んでいる。一方、教育再生実行会議の「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」（第四次提言）では、「能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換」が提言された。これを受け、中央教育審議会では、大学入学者選抜の改善に向けた審議が進行中である。

レア特別入試の実施を決定するなど、その改革内容の先進性が特に注目を集めている。筑波大がどのような学生を求め、そのためにどのような方法の入試を行おうとしているかを知ることができる。今後の国立大全体の入試改革の動きを展望する上で1つのヒントになるだろう。以下、その詳細をレポートしていく。

探究心や主体性に富んだ
学生を獲得するために

筑波大が、学内関係者を構成員とする「入学者選抜方法検討タスクフォース（以下、タスクフォース）」を設置し、入試改革の検討に着手し

図 筑波大が行うグローバル化に向けた入試改革概要

●全学版アドミッション・ポリシー

「筑波大学は、自立して世界的に活躍できる人材を育成するため、本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材を受け入れます。」

●入試改革の4つのポイント

1. 学生の自立性の涵養につながる入学者選抜

- 入学準備プログラム(仮称)、基礎強化プログラム(仮称)の導入
- 先導的研究者体験プログラム(ARE)の全学的導入

2. 入学試験の国際化対応(英語検定試験の導入を含む)

- 国際バカロレア特別入試を含むグローバル入試を全学で実施(国際バカロレア特別入試は、平成27年4月入学者を対象として、平成26年11月の推薦入試に併せて、全学で実施する)
- 4技能(Reading, Listening, Writing, Speaking)を問うGTEC CBT等の英語検定試験の導入

3. 現行入試制度の見直し

- 推薦入試定員比率の段階的引き上げ(40~50%まで)及び新たな基準導入(附属高校、既卒者、編入学者推薦及び大学教員推薦(仮称))
- 学群単位での入試等「大括り化」
- 高大院連携プログラム構築(入学後の教育体制とリンク)

4. 業務体制の構築

- 大学教育高度化センター(仮称)の設置
- 入試業務体制の整備等(アドミッションセンター機能強化等)

●グローバル入試

- 国際バカロレア特別入試
 - 帰国生徒特別入試(入学時期は選択制)
 - グローバル30学群英語コース特別入試
 - 私費外国人留学生入試
 - スーパーグローバルハイスクール指定校入試
- 募集人員:各教育組織で若干名、募集単位:全学、選考方法:面接及び論述試験
アドミッションセンター対応

たのは13年5月のことだ。タスクフォースの設置に先立ち、「全学版アドミッション・ポリシー」を、「筑波大学は、自立して世界的に活躍できる人材を育成するため、本学の教育を受けるのに必要な基礎学力を有し、探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材を受け入れます。」と設定した。筑波大の入学者は、大学の教育を受けるための基礎学力を備えていることは当然必要であり、それに加えて、グローバルな舞台で活躍するための探究心や主体性に富む人材を求めていることを、アドミッション・ポリシーで明確に定めた。

タスクフォースでは、アドミッシ

ン・ポリシーに沿って入学者を選抜するために、「学生の自立性の涵養につながる入学者選抜」「入学試験の国際化対応」「現行入試制度の見直し」「業務体制の構築」の4つを課題として設定し、入試制度のあり方についての検討を進めた。そして、13年12月に入試改革の方向性を取りまとめた(図)。

多様な学生を受け入れるための入試改革

筑波大の今回の入試改革の中で最も注目を集めているのは、「入学試験の国際化対応」だ。国際バカロレア

特別入試を含むグローバル入試を全学で実施し、一般入試や推薦入試(一部)とは、英語の「Reading, Listening, Writing, Speaking」の4技能を測るGTEC CBT等の英語検定試験を導入すると発表した。

国際バカロレア特別入試は、早速、15年度入学生から実施されている。選考は14年9月から11月にかけて行われ、合格発表は11月となる。出願資格は、国際バカロレア(以下、IB)資格の授与者、あるいは授与見込み者で、日本語を母語とする者、若しくは「日本語B(HL)」を履修している者であり、なおかつ指定の科目を履修していることを条件としている。したがって、実質的には受験者も合格者も日本人が主となることが想定される。タスクフォースで主査を務めた阿江通良副学長(教育担当)は次のように説明する。

「実施初年度は、恐らく、海外のIB認定校で教育を受け、大学は日本の大学に進みたいという日本人受験生が中心になると予想しています。しかし、政府はIB認定校を18年度までに200校に増やすという方針を打ち出していますから、いずれは

国内のIB認定校を卒業した日本人受験生の増加を見込んでいます。更に、16年度入試以降は、日本語を履修していない外国人受験生にも、国際バカロレア特別入試への出願資格を与えたいと考えています。

IB認定校の卒業者を対象とした入試を実施する大学は他にもありますが、全学規模で展開するのは本学が初めてです。今回は実施初年度であるため、募集人員を各学群・学類とも若干名としましたが、入試の定着と共に募集人員を確定していきたいと考えています」

筑波大が国際バカロレア特別入試を導入した狙いは、国際的な視野や経験を備えており、かつIB認定校での教育を通して、自主的に学ぶ・考える・挑戦する・表現するといった力を身に付けている学生が、数多く入学するのではないかと期待できるところにある。そうした力を備えた学生は、筑波大がアドミッション・ポリシーの中で求める学生像として掲げる「探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材」にも合致するものだ。

また、IB認定校出身者と一般の



筑波大
理事、副学長(教育担当)
阿江通良
あえ・みちよし
筑波大体育系教授。専門分野はスポーツ科学。学内では全学学群教育課程委員会委員長、体育専門学群長等を、学外では、日本体育学会会長、日本バイオメカニクス学会会長等を歴任。

高校出身者が、互いに刺激を受けながら共に学び合うことによって、大学教育の質を高めていくという狙いもある。今後、海外のIB認定校で資格を取得した外国人の学生が、国際バカロレア特別入試を経て入学してくるケースが増えれば、多様な価値観・社会的背景を持つ学生が更に増え、筑波大で学ぶこと自体が、グローバル時代を生きる基盤を身に付ける場となることが期待できる。

「これまで、本学には推薦入試などでIB認定校出身の学生が入学してきました。彼らの特性や必要となる教育については、ある程度把握しています。本学は元々、留学生が多い大学ですし、教員の中にも、海外の大学で教育・研究に携わってきた者が数多くいます。今後、国際バカロレア特別入試の枠が広がったとしても、十分に対応できる自信があります」(阿江副学長)

前述のように、政府は、国内のIB認定校を200校にまで増やす方針を打ち出している。筑波大が先鞭をつけた国際バカロレア入試は、今後、各大学に広がっていくと予想される。

4 技能の習得度を測る 英語検定試験を入試に導入

筑波大が「入学試験の国際化対応」として行ったもう1つの改革が、英語の「Reading, Listening, Writing, Speaking」の4技能を測るGTEC CBT等の外部の英語検定試験の活用である。全学で導入する予定であり、現在各学群・学類で実施時期や活用内容を検討中だ。

阿江副学長は、「日本人が世界で活躍する上で、弱点となっているのが英語」と話す。

「本学の学生を見ても、専攻分野では極めて高い能力を発揮しているにもかかわらず、英語に苦手意識があるために、留学をためらう学生が少なくありません。つまり、英語が来ないばかりに、世界に飛躍するチャンスを失っているわけです。国際的な学会でも、諸外国の研究者とコミュニケーションが出来なければ、存在感が薄くなってしまいます。グローバル時代において、英語力は不可欠なのです」

更に、GTEC CBT等の活用決

定には、「高校段階までに、生徒が英語の4技能の基礎をしっかりと身に付けられる教育をしてほしい」という高校の先生方へのメッセージが込められていると、阿江副学長は説明する。

「もちろん本学でも、より実践的な英語教育を行うために、外国語センター等の改革に取り組んでいます。高校、大学とで4技能を高める英語教育を継続的に行った上で、大学院段階ではTOEFLで少なくとも5割以上の学生が留学可能なレベルをクリアできるまでに育てたいと考えています」

活用する外部試験には、GTEC CBT以外に、TEAP (Test of English for Academic Purposes) なども検討している。GTEC CBTを選んだ理由は、「高校生を対象とした試験であり、学習指導要領を基本として4技能を測定する検定であること」、そして「地方の高校生でも受検が比較的容易であること」があったという。

活用法は学群・学類によって異なると予想される。

「求める学生像や英語力は学群・学

類によって異なりますから、外部試験の活用も様々になると思います」(阿江副学長)

GTEC CBT等の外部試験で一定のスコア以上であることを出願の条件とする学類もあれば、そうでない学類もあるだろうし、センター試験の英語の代わりに外部試験の受検を課す学類、個別学力試験で英語を課した上で外部試験も課す学類など、様々なパターンが出てくるだろうということだ。

いずれにせよ、筑波大では、従来のセンター試験や個別学力試験では測ることが難しい英語の4技能の力を、外部試験の活用によって測ろうとしている。国際バカロレア入試同様、この動きは今後、他大学にも浸透すると考えられる。

高大院連携を活用した 推薦入試も検討

筑波大では、他にも入試制度の見直しを行っている。

まず、推薦入試では、定員比率を全入学定員の40〜50%にまで段階的に引き上げていく。更に、新たな推

薦入試の方法として、附属高校推薦入試、既卒者・編入学者推薦入試、大学教員推薦入試などを検討している。

この中で、ユニークなのが大学教員推薦入試（仮称）だ。例えば、筑波大の教員が、出張授業やオープンキャンパスなどの場で、学問に対する高い探究心や潜在能力を持つ高校生と知り合ったとする。その生徒を中・長期にわたって観察し、筑波大で学ぶに足る能力・資質を持っていると判断したら、その教員が推薦者となって大学に生徒を推薦するという入試だ。阿江副学長は、「大学教員が、将来有望な高校生をスカウトするようなイメージです。不正を防ぐ仕組みを整えた上で、学内のコンセンサスが得られれば、ぜひ実現させたい」と意欲的に語る。

附属高校推薦入試は、高大院連携プログラムと連携して実施することを構想中である。このプログラムは、ある学問分野について高い関心や資質を持つ附属高校在学中の生徒を、将来は筑波大への推薦入学を経て大学院に進学することまで見据えて、高校・大学・大学院が連携しながら

カリキュラムを設定し、質の高い教育を継続的に施していこうとするものだ。

また、「入試の大括り化」として、従来は学群単位で行ってきた入試を、学群単位に改めることについても検討している。学群単位で入学後、それぞれの学群において幅広い視野や知識を身に付けてから、専門分野となる学類を選択するというシステムだ。学生が将来どのような分野に進むにしても、その土台には領域横断的な知識が必要になるという考え方によるものだ。

入試改革と共に教育改革も進め、学生の意欲に応える

筑波大がこれらの入試改革に着手した狙いは、前述のように、アドミッション・ポリシーに明記した「探究心旺盛で積極性・主体性に富む多様な人材」を獲得するためである。国際バカロレア特別入試の実施や推薦入試の拡充は、一般入試では獲得できないような多様な学生を確保することにつながる。現在も、筑波大は、アドミッションセンター入試や国際

科学オリンピック特別入試など、バラエティーに富んだ入試を実施している。

「これらの入試では、1人の受験生に対して30分から50分近い時間を掛けて面接を行い、生徒の志望動機や意欲、適性をじっくり見ています。本学のアドミッション・ポリシーに沿った人材を選考するのに適した入試方法です」（阿江副学長）

ただし、そうした入試では、学力面ではらつきのある学生が入学してくるというデメリットもある。そこで、筑波大は、大学教育を受けるための基礎学力が不十分である学生を対象に、入学前に課題を出す「入学準備プログラム」を実施することにした。更に、入学後は、特定の科目や分野の知識が不足している学生に対して、補習授業を行う「基礎強化プログラム」（仮称）も全学的に導入する予定だ。

このように基礎学力が不足している学生への手立てを講じる一方で、専門領域において大きく伸びる可能性を持つ学生に対しては、早期から特別に支援するプログラムの充実を図っている。

その1つである「先導的研究者体験プログラム」（ARE）は、1～3年生の早い段階から専門分野についての高い知識や関心を持つ学生が、4年生で行う卒業研究と同様の活動に取り組みめるという制度だ。これを利用して研究を行いたい学生は、大学に研究計画書を提出。それが受理されれば、学生にはアドバイザー教員が付いて、研究費が支給され、4年生でなくても研究が出来る。プログラムは従来、理系学群の学生を対象に実施していたが、13年度からは全学群を対象を広げた。

「入試制度改革することによって、深い探究心や主体性を持つ学生を獲得することに力を入れています。更に重要なのは、入学してきた学生に対して質の高い教育や支援を行うことで、大学として責任を持つて世界的に活躍できる人材に育てていくことです。入試改革と共に、様々な教育面での改革もセットで行っていく必要があります」と阿江副学長は強調する。

筑波大は、「学生の入学後の教育支援」まで視野に入れた上で、今後も入試改革を推進していく考えだ。

2014年12月に関西学院大で開催!

日本最大のグローバル大学博覧会 「第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014」

文部科学省は、グローバル人材育成に力を入れる大学を支援する「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」事業を進めている。2014年12月、この事業に採択された42大学を中心に、高校生や高校関係者などを対象とした「第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014」が関西学院大で開催される。代表幹事校の関西学院大の神余隆博副学長に狙いや思いを聞いた。

**自分の将来と向き合い
今すべきことを考えてほしい**

この度、代表幹事校として、「GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014 (以下、EXPO)」を開催できることを光栄に思っています。第2回となる今回のテーマは、「自分、ミライ発見!」グローバルキャリアから進学・留学を考えよう!」です(図1)。文部科学省が行う「スーパーグローバル大学等事業」の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に採択された42大学を中心に、博覧会形式で各大学の取り組みについて

情報発信すると共に、トークセッションやパネルディスカッション、高校生参加型のプログラムを通じて、高校生が自分の将来に向き合い、具体的に何をどのように学べばよいのかを考え、大学への期待を高める場にしたと考えています。EXPOの狙いや高校生に伝えたいメッセージなどをお話いたします。

**「内向き志向」な高校生にこそ
強く働き掛けたい**

今の日本は経済・社会が成熟し、かつてのような高度成長が望めない中で、少子化による生産人口の本格



関西学院大
副学長(国際連携機構長)
神余隆博
しんよ・たかひろ

大阪法学部卒業後、外務省入省。在デュッセルドルフ日本国総領事、国際社会協力部長、国際連合日本政府代表部特命全権大使、在ドイツ特命全権大使等を歴任。1996年博士号(法学)取得。2012年4月から現職。ドイツ功労十字勲章、フランス・シュバリエ勲章を受章。大阪大客員教授。

的な減少を迎えようとしています。そうした状況下で、日本が国際社会の中で輝きを失わないためには、これまで以上の資質や能力、意欲を備えた、いわゆるグローバル人材を育

成することが必要であり、それがこれからの大学における最大の使命といえるでしょう。ここ数年、「大学生が内向き志向になった」ということをよく耳にしま

図1 「第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014」開催概要

第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014

「自分、ミライ発見！～グローバルキャリアから進学・留学を考えよう！～」

- 日時 2014年12月21日(日)10時～17時30分 参加費無料、入退場自由
- 会場 関西学院大 西宮上ヶ原キャンパス 中央講堂(125周年記念講堂)、G号館
- 対象 高校生・保護者・高校教育関係者・その他一般
- 主催 文部科学省・経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援 採択大学 42校
- 参加大学 **国立大** 北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京大、東京医科歯科大、東京海洋大、東京工業大、一橋大、新潟大、福井大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、鳥取大、岡山県立大、広島大、山口大、九州大、長崎大
公立大 国際教養大、愛知県立大、山口県立大、北九州市立大
私立大 共愛学園前橋国際大、神田外語大、亜細亜大、杏林大、慶應義塾大、国際基督教大、芝浦工業大、上智大、昭和女子大、創価大、中央大、東洋大、法政大、武蔵野美術大、明治大、早稲田大、愛知大、京都産業大、同志社大、立命館大、関西学院大、立命館アジア太平洋大 (2014年9月3日現在)

す。確かに留学者数の推移を見ると、そのように感じます。しかし、実際に学生に接していると、言われているほど内向き志向ではないと感じることが多々あります。

高校2年生を対象とした調査(*)

では、大学進学希望者の65%が「グローバル人材になりたい」という考えを持っていることが分かりました。ところが、実際に留学したいと考えている生徒は、2割未満に過ぎません。グローバルに活躍したいと思っ

てはいるものの、「英語力に自信がない」「経済的に厳しい」など、何らかの理由で、最初から留学を考えていなかったり、希望していても諦めてしまったりしているということが、実態ではないかと思えます。

しかし、留学して日本の外に出ていくことは、かけがえのない学びをもたらします。だからこそ、可能な限りハードルを取り除き、学生の背中を押してあげることが、グローバル人材を育てる上で、大学の大切な役割といえます。

そのような観点から、このEXPOは、留学を希望する高校生への情

報発信だけを目的とはしていません。潜在的に留学に関心のある多くの高校生が、世界を舞台に活躍する人たちの体験談などから「なりたい自分」を見付けて夢を描き、そのために留学が有効な手段であると捉え、各大学に留学関連の多彩なプログラムがあることを知り、「学生時代に留学するのは面白そう」といった意識を持つようになる働き掛けるプログラムを用意しています。このように、留学への関心を喚起した上で、留学のための奨学金制度や、各大学の実践的な英語力を養成するプログラムなど、具体的な制度を伝えることで、「留学しない理由」を1つずつクリアしていきたいと考えています。

各大学の先進的な取り組みを一度に見られるイベント

今年125周年を迎える本学は、開学以来、「Mastery for Service (奉

仕のための練達)をスクールモットーに掲げ、隣人・社会・世界に奉仕する人材の育成を目指し、国際教育にも力を注いできました。各大学も同様にグローバル人材の育成に力を注いでいますが、大学個々に努力するだけでなく、今回のEXPOのように、国公私立や地域の枠を超えて集結し、一斉にグローバル教育に関する情報を発信する機会を持つことは意義深いと考えます。

会場では、49の参加大学(9月3日現在)などがブースを出展し、グローバル人材の育成について、来場者の関心を高めるように工夫した展示や説明を行います。高校生は会場を一巡すれば、各大学の様々な取り組みに関する情報を入手できます。関心のある大学があつて来場する高校生も多いと思いますが、会場を巡るうちに「この大学の取り組みも面白そうだな」といった新たな発見をするに違いありません。また、北から南まで各地の大学の充実した取り組みを知ること、地域の多様性に気付いてもらいたいという思いもあります。

参加大学にとっても、いろいろな

*一般社団法人全国高等学校PTA連合会・(株)リクルートマーケティングパートナーズ調べ「第6回 高校生と保護者の進路に関する意識調査 2013」

面から各大学の取り組みを比較し、自校の特長をより良いものとするために磨きをかける機会となるでしょう。良い意味での協力と競争が生まれ、大学同士が切磋琢磨できるようなイベントにしたいと考えています。

東京オリンピックを切り口に 将来へのイメージを膨らませる

当日のプログラム(図2)は、大きく午前・午後に分かれています。

午前は、トークセッションとパネルディスカッションが中心です。トークセッションでは、2020年に開催される東京オリンピックを切り口として、今の高校生が、日本、そして世界にどう貢献できるかを考える内容を予定しています。

1964年開催の東京オリンピックは、日本の高度経済成長を象徴する出来事で、更なる飛躍の契機となり、4年後の68年には国内総生産が当時の西ドイツを抜いて世界第2位となりました。その当時と今は状況が全く異なりますが、日本にとってオリンピックを契機とする2度目のジャンプはあるのか、日本が世界へ

と門戸を開く第2、第3の開国のきっかけになるのではないかと、そして、その中で今の高校生はどのように生きていくべきか、そうした議論を展開していきたいです。高校生には、5年先、10年先を見つめて自分のことを考えて欲しいと考えています。まさに、オリンピックが開かれる年は、今の高校生がちょうど大学を卒業して社会に出る時期であり、イメージを膨らませやすいことも、東京オリンピックをテーマに定めた理由です。

パネルディスカッションでは、高校生にとつて、より身近な議論を展開します。高校生にも「2020年、国際化する日本社会にどう貢献できるか」というテーマで提案してもらい、トークセッションの登壇者が議論を深めていくことを計画しています。グローバル人材として、具体的にはどのような能力が求められるのかといったことを深めていき、高校生と一緒に考える場に行きたいと思えます。夢を見ることはとても大切ですが、それを実現するためには現実を引き寄せて考える必要があります。パネルディスカッションでは、そのような視点も提示したいと思います。

総論を踏まえた各論で 具体的な手段を提示

午前のプログラムが「総論」であるのに対して、午後のプログラムは「各論」を進めていき、高校生参加型の企画が中心になります。

例えば、午前のプログラムの話を聞いて「なりたい自分」へのイメージを膨らませた高校生は、次に「そのためには、大学でどのような学びをすればよいのか」と考えるでしょう。そこで、高校生参加型企画①「世界で働く人たちに聞いてみよう!」では、航空会社、商社、旅行会社などで活躍する社会人を招き、グローバルに活躍するためには、具体的にどのような能力が必要かを語ります。また、大学生が留学に踏み切れないう大きな理由の1つに、英語力への不安があります。そこで、「カリスマ英語教師」として知られる兵庫県の私立灘中学・高校の木村達哉教諭に、苦学意識を克服し、英語を楽しく勉強する方法について講演してもらいます。

その他、「各国からの外国人留学生

の経験談から日本の良さを再発見し、日本人としてのアイデンティティを深める」「大使館員や留学経験者の話を通して、留学の実情を知り、勉強方法や奨学金などの情報を得る」「高校生による英語プレゼンテーションを聞いて刺激を受ける」といった企画を行う予定です。また、ランチタイムには、留学生の協力を得て、世界各国の料理を提供します。

ここまで、私は「グローバル人材」という言葉を何度か用いています。この言葉が意味するところを一言で表すのは、なかなか難しい問題です。一般に、英語力、交渉力、多様性、アイデンティティ、タフネスなど、様々なコンピテンシーが定義されていますが、それら全てを満たす人材を育てるのは難しいでしょう。

恐らく、グローバル人材に決まった形はなく、いろいろなタイプが存在するのではないのでしょうか。極端な言い方ですが、英語が苦手なグローバル人材がいてもよいのです。1つでも「これだけは誰にも負けない」という強い自信やアイデンティティを持ち、世界に目を向けている人材が「グローバル人材」といえ

図2 「第2回 GO GLOBAL JAPAN EXPO 2014」プログラム概要

●全体企画 「TOKYO 2020: 社会はどう変わる？ 私たちに何ができる？」

東京オリンピックが開催される2020年は、現在の高校生が大学を卒業し、社会人として歩み始めるタイミングと重なる。東京オリンピックを契機に、国際化が進む近未来の「日本の姿」を識者の話を通じて思い描き、「自分たちがどう貢献できるか」を考える。

●トークセッション テーマ「東京オリンピック・パラリンピック2020への期待:日本はこう変わる」

国際経験豊富な識者など、3人程度によるトーク。コーディネーターは、関西学院大教授で、日本テレビ「NEWS ZERO」キャスターの村尾信尚氏。

●パネルディスカッション テーマ「2020年、国際化する日本社会にどう貢献できるか」

高校生登壇者の提案等を踏まえて、トークセッション登壇者が議論を深める。

●高校生参加型企画① 「世界で働く人たちに聞いてみよう！」

グローバルキャリアで働く人々の話から、なりたい自分になるために、どのような学びが必要かを考える。キーノートスピーカーは、「ナニワのカリスマ添乗員」の異名を取る、日本旅行メディアトラベルセンター「ヒラタ屋」代表・平田進也氏。他にも、航空会社、商社、国際的に活動するNGOなどから3人の登壇者によるパネルディスカッションを行う。

●高校生参加型企画② 「Try English! 英語の苦手意識、克服しよう！」

「カリスマ英語教師」として著名な灘中学・高校教諭の木村達哉氏によるセミナー。「英語は楽しい」という意識を芽生えさせるきっかけを提供。

●高校生参加型企画③ 「What's 'Cool'? 目から鱗! 留学生の日本再発見」

留学生が来日して発見した日本について、易しい英語で発表。留学生の目を通し、日本人が気付かない日本を発見することを狙いとする。関西学院大や他大学の留学生16人が参加予定。

●高校生参加型企画④ 「留学のこと、大使館員&先輩が教えます！」

大使館員や各国に留学経験のある大学生約16人が、各国の大学情報や留学事情を伝える。

●高校生参加型企画⑤ 「高校生英語プレゼンテーション大会」

「世界の中の日本 いま私ができること」をテーマに、本選出場者7人がプレゼンテーションを行う。

*プログラムの内容は全て2014年9月3日現在のものです(内容は変更される場合があります)。詳細は専用のウェブサイトをご覧ください。<http://ggj-expo.com/expo2014/>

るのだと思います。

そうした人物となるために何より大切なのは、学び続ける姿勢です。社会に奉仕するために得意分野を磨くと共に、「自分がなりたいもの」だけではなく、「自分がなるべき姿」という視点からも、自分の将来を考え

るきっかけをEXPOで提示したいと思えます。

保護者や高校教員との協働を促進する機会に

EXPOでは、保護者や高校の先

生方にも参加を呼び掛けています。特に、グローバル人材を巡る議論や各大学の情報発信は、保護者にとって子どもの将来を考える上で新たな発見を得る場となるでしょう。

保護者が社会や未来について自分の考えを持ち、人生の先輩としてアドバイスし、応援することは、子どもの将来に大きなプラスとなります。私たち大

学も全力を尽くしますが、学校任せで子どもが育つものはありません。子どもの将来について、大学と保護者が一緒に考える機会となるようなEXPOにしたいと考えています。

また、グローバル人材の育成においては、高校の先生方の協力が欠かせません。出来るだけ早い時期から、子どもに対して留学という選択肢を提示しておくことが望ましいと思えます。

しかし、大学だけではグローバル人材の育成が難しいのと同様に、高校が単独で頑張ろうとするのもまた厳しいと思

います。ですから、高校の先生方は、決して自分たちだけで悩まないでいただきたいと思えます。近年、高大連携の取り組みが活発化しています。出来ることはまだたくさんあるはずですが、大学と高校が協力して生徒を育てていきましょう。EXPOでは、高大双方にとって、これからの取り組みのヒントが見いだせるはずです。

今後、日本が国際社会で活躍する上で主役を担うのは、今の高校生に他なりません。生徒たちが持つ可能性は、まさに無限に広がっています。EXPOは、高校生がそうした自覚と覚悟を持つように促し、大学に進んで勉強する理由を深く考える機会とします。

世界で通用する日本人を育てるために、大学は日々、努力を続けています。グローバル人材の育成に熱心に取り組む大学が全国から集まるEXPOの会場で、きっと高校生は大学側の「本気」を感じ取ることでしょう。

それでは、皆様に会場でお会い出来ることを楽しみにしています。

シリーズ

ウェブで参観できる 「授業大公開」がオープン!



英語

2014年2月14日公開

兵庫県立川西緑台高校 大目木俊憲 おおめぎ・としのり

生徒が「英語で考え、情報を得た」と実感できるよう、英語で授業を行う

◎導入の15分で『教科書を読みたい』と思わせる

私が初めて英語で授業を行ったのは、初任校1年目の時です。つまらなそうに授業を受けている生徒たちを見て、試しに英語で授業をしてみたのです。英語が苦手な生徒でも意欲的に取り組む姿を見て、私はその意義を感じ、それ以降、英語で行う授業のあり方について考えてきました。

授業で最も大切にしているのは、生徒に「英語で考え、英語で情報を得た」と実感させることです。そのため、生徒が「教科書を読みたい」と思うように、導入の15分に力を入れています。続いて、生徒が教科書の素材文を理解しやすくなるよう単語や熟語の確認をした上で、素材文の内容に関する質疑応答を行います。ここでは、素材文の最初の行についてから質問するのではなく、要点となる内容について聞いたキー・クエスチョンを投げ掛けます。全ての質問に答えた時に、生徒が素材文の内容をある程度、把握している状態にするわけです。

もっとも、英語で授業を行うことにこだわるあまり、生徒が正しく情報を理解できなければ本末転倒です。英語だけでは情報を伝え切れない場合、日本語で指示を出したり、日本語で考えさせたりするようにしています。例えば、今回の授業で扱った地雷の問題は、解決方法をしっかり考えてほしいと思い、英語で考えるのは難しいという生徒には日本語で考えるよう指示しました。

◎英語による授業は緊張感を生み、集中力を高める

英語で授業を行うメリットの1つは、生徒の集中力が高まることです。True or False や Q & A のように質問がパターン化してしまうと、生徒はそれに慣れ、次

第に集中力が低下していきます。しかし、英語で授業を行うと、生徒はどんな形で質問されるのかを予測できないため、緊張感が生まれ、授業に集中するのです。また、英文から情報を得るスピードが速くなり、英語力が向上する成果も見られます。

◎肩ひじを張らず、自分なりの方法で内容を伝える

英語の授業を英語で行うことに悩んでいる先生にお伝えしたいのは、1行目から全て英語で話そうと肩ひじを張らなくてもよいということです。教科書の素材文の内容を最初から最後まで全て伝えるというスタンスから少し発想を変えて、自分なりの方法で素材文の内容を伝えてみてはいかがでしょうか。

私の授業を見ていただき、さまざまなメッセージをお寄せいただければ幸いです。

■大目木先生のティーチングプラン *ウェブサイトでご覧いただけます

TIME	CONTENTS/Activity	AIM	Q & A
10:00-10:15	Introduction of today's lesson. To check the students' understanding of the main idea of the story.	To check the students' understanding of the main idea of the story.	
10:15-10:30	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
10:30-10:45	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
10:45-11:00	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
11:00-11:15	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
11:15-11:30	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
11:30-11:45	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	
11:45-12:00	Reading the story. To make their think about what is important in the story by giving questions and making them answering their questions. To explain the points that the students should focus on in the story.	To introduce today's topic and activate them to read the story. To make them understand what the main focus of today's story is.	

アクセスはこちら！

ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) にアクセスいただき、トップ画面右のメニューバーから「シリーズ 授業大公開」を選択してください。

教師全体の教科指導力を向上させるためには、指導内容・方法の共有が不可欠であり、共有の場として設けられるのが公開授業です。ただ、時間的・地理的制約などで誰もが参加できるわけではありません。そこで、ベネッセ教育総合研究所は、実際の授業を撮影した動画をウェブ上で発信する形で公開授業を実現しました。初回は2人の先生が登場。ぜひご覧いただき、ご自身の授業改善にお役立てください。

2014年3月14日公開

地理

神戸大学附属中等教育学校 **高木 優** たかぎ・すぐる



個人思考の時間を大切にすることで、グループでの言語活動の効果を最大化させる

◎グループ学習と生徒との対話を組み合わせた授業

私は新任の頃から、生徒と対話をしながら授業を進める生徒参加型の授業を心掛けてきました。それに、本校が50年以上継承してきたグループ学習の要素を組み合わせたのが、今の私の授業スタイルです。

今回公開する授業では、ヨーロッパの中でも生徒が具体的なイメージを持ちづらい東欧について考察しています。教科書では、東欧はEUの中でも労働賃金が安く、労働力の供給場所と位置付けられており、日本の製造業も進出して西欧で売る製品を製造している、とされています。そうした理解が本当に正しいのかどうか、データを基に検証するのがテーマです。

私の授業では、自作のワークシートを使いながら、テーマについて個人で深く考える時間、仲間と共有して視野を広げる時間を設け、それを基に個人の考えを更に深めていくというプロセスを大切にしています。

◎個人学習とグループ学習の繰り返しで考えを深める

今回の授業を例にして説明します。まず、個人で東欧のイメージを考えてシートに記入し、続いてグループで、ヨーロッパ、アフリカ、ユーラシア大陸を中心とした3枚の世界地図を使って、東欧の地理的な位置付けを考えます。

次に最新の論文を提示し、教科書とは別の切り口から東欧の産業構造について考察します。グラフを丁寧にみると、東欧では確かに製造業は多いのですが、ポーランドにある日系企業の50%以上が卸売・小売業であり、東欧に近いオーストリアには日本企業の販売統括部門があることが分かります。これらは、東欧が労働力の供給場所というだけでなく、市場としても開拓が見込まれていることを示しており、そこに生徒が気付

けるかどうか、今回の授業のポイントです。

グループで話し合った内容をホワイトボードに書いて発表し、全体で共有した後、個人で本時の授業を踏まえて、東欧と日本との関係を100字程度の文章でまとめ、授業は終了となります。

言語活動を取り入れた授業は、講義型の授業以上に生徒の意欲を引き出せることが、テストの結果でも明らかになっています。同じ単元について、4年生(高1に該当)には言語活動を取り入れた授業、5年生(高2に該当)には講義型の授業と分けて行ったところ、4年生の方がテストの点数が良いという結果が出ました。

授業公開の際、私が意識しているのは、先生方が気軽に取り入れられる授業をすることです。これからも、先生方が「これならやってみよう」と思えるような授業を追究していきたいと考えています。グループ学習や言語活動を取り入れてみたいという先生は、ぜひ、本校へ授業見学にいらしてください。

■高木先生のティーチングプラン *ウェブサイトでご覧いただけます

6. 本時の学習 (2次6時)																		
(1) 主題	【ヨーロッパの生活・文化】 東ヨーロッパと日本の関係																	
(2) ねらい	・東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。 ・これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。																	
(3) 教材観・方法観	東ヨーロッパは地表面での位置、自然的・人文的特徴がその成り立ちと変化、並びに日本との関係によって、生徒のイメージと大きくかけ離れている地域の1つである。一方で近年ますます、貿易や企業の進出、観光などの、人々の相互作用の関係が強まっている地域でもある。その中で、様々な地図や資料を読み取ることで、イメージと現実との差違に気付く、国際的な問題解決能力の礎となる情報リテラシー、考察力の向上を目指す。																	
(4) 指導と評価の計画	<table border="1"> <thead> <tr> <th>ねらい</th> <th>主な学習活動・内容</th> <th>評価方法と【評価規準】</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。</td> <td>スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。</td> <td>ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】</td> </tr> <tr> <td>これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。</td> <td>これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。</td> <td>ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】</td> </tr> </tbody> </table>		ねらい	主な学習活動・内容	評価方法と【評価規準】	東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。	スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。	ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。	ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】							
ねらい	主な学習活動・内容	評価方法と【評価規準】																
東ヨーロッパのスケールの違いによる、イメージの違いを読み取る。	スケールの違う資料から東ヨーロッパのイメージの違いを読み取る。 グループで意見を交換し合い、発表する。	ワークシートへの記入(提出)・内容やグループ活動の発言の様子から、「スケールの違いによる地域のイメージの違いを読み取れたか」を評価する。 【答】																
これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてまとめる。	これまでの学習を踏まえ、これからの東ヨーロッパ諸国と日本の関係についてワークシートにまとめる。	ワークシートへの記入(記述量・内容)から、「課題をこれまでの学習を踏まえ考察し、自分の考えを述べているか」を評価する。 【思】																
(5) 本時の流れ	<table border="1"> <thead> <tr> <th>時</th> <th>学習の流れ</th> <th>生徒の活動</th> <th>指導上の留意点・評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0</td> <td>時事問題の確認</td> <td>○最近のニュースについて発表し、確認する。</td> <td>○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。</td> </tr> <tr> <td></td> <td>本時の学習の主題と流れの確認</td> <td>○本時の主題とねらいを確認する。</td> <td>○本時の主題とねらいを確認させる。</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担</td> <td>○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ</td> <td>○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内での役割分担について責</td> </tr> </tbody> </table>		時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価	0	時事問題の確認	○最近のニュースについて発表し、確認する。	○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。		本時の学習の主題と流れの確認	○本時の主題とねらいを確認する。	○本時の主題とねらいを確認させる。	5	東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担	○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ	○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内での役割分担について責
時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価															
0	時事問題の確認	○最近のニュースについて発表し、確認する。	○発表されたニュースに対して、簡単な解説を加える。															
	本時の学習の主題と流れの確認	○本時の主題とねらいを確認する。	○本時の主題とねらいを確認させる。															
5	東ヨーロッパのイメージについて「役割」を分担	○東ヨーロッパのイメージについて考察する。 ○個人思考を踏まえ、グループ	○本時の授業の流れについて確認する。 ○グループ内での役割分担について責															

確固たる「軸」が必要だと感じた

8月号の特集を読んで感じたのは、物質的に豊かな時代に精神的な豊かさを得るためには、確固たる「軸」が必要であるということだ。今後の指導に大いに参考になった。座談会では、ソフトバンクモバイル株式会社の喜多の裕明常務執行役員が「教師が社会の変化を知ることが大切」と述べていたが、学校という閉ざされた環境にいる我々は社会を常に意識し、目を外に向けておかなければいけないと改めて感じた。また、鳥山恵美子さんの記事では、その経歴に刺激を受けつつ、「逆境をチャンスに（ポジティブ思考）」「ジェネラリストかスペシャリストか」という考え方に共感した。

「愛知県・匿名希望」

10年後の社会を考える機会となった

10年後の社会について真剣に考えなければならぬ時代になったと、8月号の特集を読んで感じた。生産年齢人口の減少、地域間格差、グローバル化の問題が、繰り返し報道されている。その中で、大南信也さんの記事では、公共事業に頼らない地域づくりにより地域の縮小を緩和させるヒントがあると示していた。都会に出て限られたトップ層が主役として活躍し、それ以外の人が不安と不満を抱えながら暮らす社会より、それぞれが主役として暮らす地域が地方であれば、人の流れも変わると思った。

「新潟県立十日町高校・清水 哲」

着眼点の変化や工夫で改革は出来ると実感

8月号「新課程 指導最前線」の北海道札

Reader's VIEW

Volume 4

読者のページ

読者の先生方からのご意見を紹介します

幌西高校の事例で最も感銘を受けたのは、従来の取り組みを精選し吟味し、改善することで効果を上げた点である。限られた時間や体制の中であっても、着眼点の変化や工夫によって、いつでも誰でも改革は出来ると、勇気をもらった。また、愛知県立豊田南高校も同様に、従来のあり方に生徒の目線に合わせたやり方を模索することでその成果を得ているところに感銘を受けた。

「愛媛県立今治南高校・重松洋一郎」

教師一人ひとりの力の結集という視点に共感

8月号「指導変革の軌跡」の長野県上田高校が行っていた、「チーム医療」をキーワードに教師一人ひとりの力を結集するという視点に大いに共感した。教師が個々に行う指導の力を、相互作用によっていかにシナジー効果を生むものに高められるかが、学校として問われる指導力であることを改めて認識した。加えて、そうした指導力の向上には、その学校独自の校風を活用していく視点も見逃せないと感じた。

「兵庫県・私立神戸国際中学・高校・徳岡 努」

教師川柳

変わるもの 変わらぬものを 追いかめ

長野県・一徹

「VIEW21」高校版はウェブサイトでもご覧いただけます！

本誌の最新号、及びバックナンバーは、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトで公開しております。誌面のPDFや「生きたデータの徹底研究」の図版もダウンロードできます。ぜひご利用ください。

詳しくは

VIEW21 高校版

検索

<http://berd.benesse.jp/magazine/kou/>



編集後記

◎「軸」をつくり「修正力」を高めることは、大人にとっても難しいテーマかもしれません。しかし、未来からの留学生である現在の高校生に10年後の社会を力強く生きてほしいという願いから、このテーマを特集で取り上げさせていただきました。今号では、「軸」を育み「修正力」を高める土台としての「自己肯定感」に着目しました。この「自己肯定感」こそ、教育で求められる「不易」の部分なのかもしれません。今号も最後まで読んでくださり、ありがとうございました。(竹内)

VIEW21 10月号 Vol.4

2014年10月24日発行

発行人 山崎昌樹
編集人 春名啓紀
発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸 満、二宮良太、長谷川敦
撮影協力 荒川 潤、谷口 哲、ヤマガチイキ
イラスト協力 カモ

VIEW21編集部
〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング14階

©Benesse Corporation 2014

VIEW21

2014
December
12月
Volume 5

次号は
12月18日発行(予定)

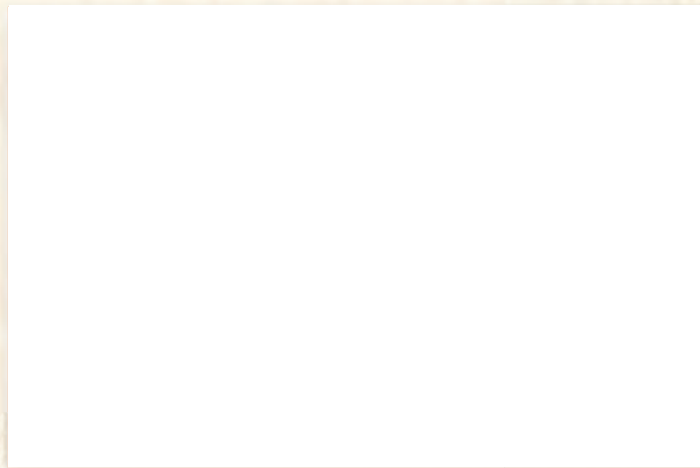
「VIEW21」高校版は
年6回の発行です

COVER STORY

教師と生徒の肖像

地域を思う心

表紙の学校 北海道紋別高校 加藤洋平先生



7年前に2校が統合して誕生した北海道紋別高校は、普通科・電子機械科・総合ビジネス科を擁する、紋別市内唯一の高校だ。「生徒は素直で礼儀正しく、他人を気遣う思いやりもあります。そんな生徒たちを育ててくれた地域に貢献できるように、地域と学校とのつながりを深める機会を出来るだけ設けています」と、進路指導部長の加藤洋平先生は語る。

4年前に始めたのが「職業人座談会」だ。地元の銀行やホテル、販売業、福祉施設などで働く人たちを招き、1年生が学科を超えて車座になり、紋別で働くことへの本音を聞く。「自分の子どもがその職業に就きたいと言ったら勧めますか」「辞めたいと思ったことはありますか」といった鋭い質問が飛び交い、地域の人も真剣に答える。「地域の人たちの言葉と共に、同級生に刺激され、働くとは何か、将来何をしたいのかを深く考えるきっかけにしています」と先生はその狙いを話す。

年数回行う「勉強12時間耐久レース」では、保護者が差し入れを持って激励に訪れる。レースが終わると、生徒は、長時間の学習を乗り切った自信と仲間と一緒に頑張ったという一体感に包まれる。また、夏休みの開催時には中学3年生向けに「6時間版」を設け、参加を呼び掛ける。高校生姿を1年後の自分と重ね合わせ、頑張る素晴らしさを、中学生に感じてほしいからだ。いずれは小学校とも連携し、12年間を見通した活動をしたいと、加藤先生は言う。

「卒業後、大半の生徒が紋別を出ます。初めて外に出て、故郷を思う時、仲間と頑張った、学校や地域に支えられたという経験があれば、いずれ紋別に戻り、地域のために役立ちたいと思うはずです。小学校や中学校、企業と一体となって生徒を育てていくこと。それが私の思いです」。

VIEW21

ビュー21 高校版 Volume4 2014年10月号

2014年10月24日発行 / 通巻第348号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Corporation 2014お客様
サービスセンター

【フリーダイヤル】 0120-350455

受付時間 月～金 8:00～19:00 / 土 8:00～17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17